
エヴァ兄

ケースケ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァ兄

【Nコード】

N3508M

【作者名】

ケースケ

【あらすじ】

転生した先はエヴァンジェリンの兄！
可愛い妹の為に頑張ります。

この作品は、オリ主で、しかもオリ技オリ設定が出てくる恐れがあります、

その点が大丈夫な方は拙い文ですがお楽しみになってください。

生まれ（前書き）

処女作です、なにとぞ温かい眼でご覧ください

生まれ

僕の名前は、エレオス・マクダウエル、
名前から分かる人もいるかもしれませんが、そう、ネギま！にでてくる

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの兄です。

今時流行っている転生者の内の一人です、もともとは日本ではのぼのと暮らす大学生だったんだけど
火事で燃えている部屋で寝たまま死んだっていう情けない落ちで転生しました。

なんで転生できたか？などは良くわからないけど、自分以外にも転生者がいるようです。

それを知った話はまたおいおい話すとして・・・

小さい頃から前世で蓄えた知識や言動で僕スゲーしてたら、
親にこういわれちゃいました

「寄るな！悪魔の子！！！！」

いやいや生んだのは貴方ですけど、
そうやって2歳の時に牢で鎖につながれていました、丁度その頃に妹が生まれましたね。

やはり名付けられる名前はエヴァンジェリン、
ネギまの世界だと確信しましたね。

牢に繋がれた自分は、時々飯を運んでくる使用人しか喋る相手はい

ませんでした、

使用人はとても優しい人ばかりでしたが、一定の距離は必ず離れていました、多分心の奥底では悪魔の子と認識していたのでしょう。飯は1日1食、幸い繋がれていたのは左足の足首だけ、体が動かせない訳ではありませんでした。

そして自分がそのとても退屈な時間の中、していたことは魔法の練習でした。

励んだ結果、1年足らずで体の魔力を移動させることに成功しました、しかし杖がないと魔法が使えません。魔力を手に集中させて足の鎖を殴って見ることもありましたがこの鎖は魔力コーティングしてありましたね、全然ビクとしませんでした。

そして魔力コントロールの特訓、暇なときは瞑想ということを繰り返して4年の月日がたちました、今ではよりはやく魔力のコントロールが可能になりました、

そうそう、6歳になって嬉しかったことが一つ、時々妹が自分の下にこっそり来てくれるようになりました。自分の食べる分であろうパンやミルクを持ってですよ？最高の妹ですね。

「おにいちゃん、大丈夫？今回はこれだけしか持ってこれなかったけど・・・ごめんなさい」

目を潤ませながら僕に謝ってきますが、もう本当に妹には感謝していますよ・・・

「全然大丈夫だよ！ありがとキティ！」

妹を抱きしめながら僕は精一杯の感謝の気持ちを伝えます。

こんな妹に何にもしてあげることが出来ない自分が情けない、10歳の誕生日の時に、吸血鬼にされるのをどうしても阻止して上

げたいのです、

そのために僕は着々と魔力のコントロールを学びます、

時々両親が僕の元にやって来て、哀れみの視線を浴びせますが、今の僕にはそんなものききません。

今僕の理念は妹を助けることだけです。

そして着実に時は進んでいきました、僕は12になり、魔力も扱いも自分では旨くなったと思います、

そしてキティの誕生日は明後日、僕は作戦の確認を行います、

まず、今まで練習した魔力のコントロールを使って左足首の表面を魔力過剰で爆発させます、これで鎖は取れるはずですが、もし取れなかった場合は左足を捨てます。魔力を過剰供給で神経に痛みは通りにくくします。これである程度動けるはずですが、使用人の情報に寄り、11時以降はキティの部屋に近寄るなどといわれてるそうなので10時に作戦を決行させます、そして、キティの元まで行き自分の全魔力をキティに注ぎキティを走って逃げさせます、これは夜中に行いますので、なるべくばれないようにします。

そして自分は此処に残りキティが逃げるための時間を稼ぎ、運命を受け入れます。

これで自分は死ぬかもしれないが、妹は助かるだろう、妹は逃げることを渋るだろうがその時は全力で説得して見せます、

キティの誕生日は明日、

今日もこっそりとキティは自分の下にやってきました、

嬉々として自分に誕生日のことを話します、見ていて本当に和みま

す。

しかしこの笑顔を見ることが出来るのも明日まで、本当に無事に暮らして欲しいと思います、

作戦決行の時が来ました、

僕はなるべく音を鳴らさぬように、足を爆発させました。
痛い痛い痛い痛い

でも、鎖は解けました、

そしてキティの元に急ぎます。

キティの部屋までたどり着き、こっそり扉を開ける。

「キティ！起きて！」

早く・・・早く！！

「・・・うん？どうして此処におにい・・・！！？どうしたの！！
そのあゝむぐう」

キティの言葉の途中で口を塞ぐ、

「キティお願いがあるんだ、いまから此処に悪い人がやって来る、
だから今からその窓から逃げて欲しいんだ！！お願いだ！！キティ」
その言葉にキティの目が見開かれる、

キティの言葉を待たずに僕はキティにありったけの魔力をキティに纏わせる、

「え！これどうなってるの？悪い人って？おにいちゃんどういっ

となの!？」

明らかに戸惑って狼狽するキティを宥める、

「大丈夫、此处は僕が足止めするから、さあ行くんだ!そして町まで行ったらこの紙に書かれた所を訪ねて理由を説明するんだ」

僕はあらかじめ使用人から聞きだしておいた、高位の魔法使い、原作で言うところとマジステルマギの住所が書かれた紙を渡す。

「足止めって?おにいちゃんは一緒にいつてくれないの?」

「僕の足は見ての通りこの有様だ、だから一緒には行けない、お願いだ!早く逃げてくれ頼む!僕もこれがすんだらすぐそこに向かう!だから・・・早く!!」

可愛いキティについてしまった一つの嘘だけど、今なら許される気がする、

キティはうるたえながらも窓から外に出る、

「良くわからないけど、おにいちゃん必ず来てね!!」

そっぴい残して10歳とは思えぬスピードで走り去っていく。

一人部屋に取り残された自分は妹を逃した事に安堵を覚える、

ああ・・・これでキティは救われ、「結構な兄弟愛だな!おじさん感動してお前を殺してしまいそうだよ!!!」

後ろから声が掛かる、明らかにさっきむき出しの声だ、

聞かれて居たのか!!くそ!此处で時間を稼ぐしかないのか!!

振り返ろうとした矢先に自分の左頬に衝撃が走り、壁に打ち付けられる、

「どこでこの計画を知ったか知らないが、粹な真似してくれるじゃねえか！よお悪魔の子！！」

男の顔は憤怒で染まっている、

「まあいいわ、お前でやってみるか」

男はニヤリとした下碑た笑いを浮かべる、

これで・・・これでキティは吸血鬼にならないで済む・・・よか
「ああ！悪いけど妹の方はもう一人が追いかけてるから、帰ってくるのも時間のもんだいだよ？」

その言葉に僕の顔は絶望の色に染まる。

そんな・・・そんな！！キティはキティは！！

「何であいつを狙うんだ」

痛む体、魔力切れで困憊する体から声を絞り出す、

その時外でキティの声が聞こえた、

「放して！！なんでこんな事するの！？助けておにいちちゃん！！！」
その声を聞き俺は、自分の無力さを嘆いた。

そんな俺を見て男はいった、

「誰がお前に教えるか、おとなしくしてろ」
その瞬間僕の意識は暗転した、

育ち

目が覚めたとき隣にキティが居て本当に救われた気持ちになったのを覚えている、

あの後2人が目を覚ましたときにはすでに、誰も居なかった。ただ残ったのは、太陽の日差しでダメージを受ける体だけだった。

僕は結局キティを守りきることが出来なかった、それは、己が弱いから、僕は強くなる、今度こそキティを守るために、心にそう誓った瞬間だった。

それからというものの、生活や暮らしは一変した、本々牢暮らしの自分にはたいしたことのない変化だったが、キティにとっては正に死活問題であった。

ことあるごとに体調を崩し、日を浴びることに火傷を負い。

本当に見てられないような日が続いた、

あの事件から10日後、今僕達は元居た場所を離れ、森の中で暮らして居る。

あの事件の後に吸血鬼が居るという情報が流れたらしく、4人の人

が僕達兄弟を殺すためにやってきた、
命からがら逃げる日々が続いたので、引越したって訳だ。

深い深い森の中、もちろん光なんて届かない、

「キティ・・・大丈夫か？」

この所ずつと体調を崩しているキティの頬に触れる。

「うん・・・大丈夫だよ・・・おにいちゃん」

全然大丈夫そうには見えない、顔が真っ青だ、

キティ・・・ごめんな

心の中で一人つぶやいた。

こんな問答を繰り返す日々も過ぎ去り、僕らが吸血鬼となつてから
2年の月日が経過した。

キティの体調も以前に比べて大分マシになり、日の光の下でも少し
は大丈夫なようになった、

僕は夜、近くの町まで出向いて初心者用の魔法の教本と、杖を二つ
購入した。

これからは魔法を練習するつもりだ、
原作では過去のことについて詳しく書かれていなかったが、多分想

像絶する苦しみを味わっていたのだろう、死のうと思ってても死ねない、殺されない、正に地獄だろう・・・

そんな苦しみを少しでも軽減させてやるために、キティと魔法を習うことにした。

習うといっても、誰かに教わるわけではない、いや教われないのだ。高位の魔法使いは自分達を一目見るだけで吸血鬼と分かってしまう、故に人里に行くときはなるべく人目を避けていくのだ、まだ魔力をコントロールできず隠すことの出来ないキティは町に行くことすら出来ない、そんな状態で襲われるはずがない。

とゆうことで、2人協力して魔法を覚えよう！とゆうことになった。復習するためにも、

キティを一人にさせないためにも。

文字が読めなかった・・・orz

そう、ずっと牢に入ってた僕が文字なんて読めるはずがないのだ、キティに文字を教えてもらう所から始まった、

「これで・・・が・・・で・・・したらそうなるの、分かった？」
本当に情けないです。

文字をカタコトに読めるようになるまで2週間も掛かった、その間

キティは瞑想、自分の魔力を感じさせる事に集中させた。
まあ結局出来なかったみたいだが、

「よし！文字も読めるように（書けない）なっただし魔法の勉強はじめようか？」

気分を切り替えて、本気で取り組もう。

「おにいちゃん・・・結局感じ取れなかった・・・違和感みたいなのはあるんだけど・・・」

申し訳なさそうにいうキティの顔が可愛いすぎる。

「しょうがないから、裏技を使おう！ちょっと背中出して？」

手っ取り早く魔法を覚えさせるためだからしょうがない、

背中を出して、後ろを向くキティの背中に手を添える、

そして徐々に魔力を送り込む。

「感じるか？キティ、いま感じてる違和感を引っ張り出して来い！」

「・・・これ？これかな！？おにいちゃん！わかったよ！！！」

無邪気な笑顔で喜ぶ、これを見ただけで生きててよかったと思う。

「よし、それじゃこの杖を持って！」

そんなこんなで自分も魔法に挑むことになった、自分の得意属性は何なんだろうか・・・

ちなみにキティは原作通り氷系と闇系が得意だった、ブラクテ・ビギ・ナルで初期魔法全部唱えれば、どれが得意かは大体把握することが出来る、

僕の得意属性は・・・

氷系と闇系・・・おお！キティと一緒にジャン

これは嬉しい誤算だった、これで呪文系統の練習は一緒になるわけだ、

魔力コントロールが出来ている分、僕が魔法を使うのは簡単だった、キティがやつと杖の先から氷を出した頃にはすでに魔法の矢と武装解除がつかえていた、

これだけ使えれば、膨大な魔力をもった兄弟は、並以下の魔法使いならこり押しで倒せるレベルだろう。

でも僕達は目標に向かって努力し続けた、

そして7年の月日が経った。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け

『魔法の射手・連弾・氷の17矢』」

「リク・レク・ロ・リック・レイロック闇の精霊29柱『魔法の射手・連弾・闇の29矢』」

「また負けた・・・おにいちゃんちよつと手加減してよ!!」
頬を膨らませながら起こるその姿は7年前と変わっちゃ居ない、

「ごめんね?でも手加減して勝っても嬉しくないでしょ?」
この手の話をするときはいつも、この言い方をする、
そうすればキティも納得してくれる。

でも今日は違った、

「それじゃあ、もう一回やらない?」
なぜか自身に満ち溢れたような表情をしている、

「しょうがないなあ、一回だけだよ?負けたら、認識障害の結界張りなおしてきてねー」

ここら一帯は全部僕の認識障害の結界が張ってある、

深い森の中だから、そんな必要もないんだけどね。

「んじゃあ、あの木の葉が地面に付いたらスタートね、ハンデで落ちるまで詠唱してていいよ」

正直いまのキティじゃ天地がひっくり帰っても僕には勝つことが出来ない、

「おにいちゃん・・・まけないよ!」

どこから出てくるのだろうか・・・その自身は。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ、氷精、闇の精。」

んん!!あの呪文は、闇の吹雪じゃないか!もうそんな所まで行ったのか・・・

キティは飲み込みが早いなあ・・・

まだ木の葉は落ちていない、

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪『闇の吹雪』!!!!」

呪文の詠唱終わりと同時に木の葉が落ちる、

目の前に手を突き出し、障壁を3枚重ねる、
これは原作で、ネギがやっていたことだ、

キティの闇の吹雪は僕の障壁に辺り3枚目が消えると同時に消えて
なくなってしまう。

驚愕とするキティを横目にキティに瞬動で一気に間合いをつめて首
元に手刀を当てようとする、
しかし、キティの物理障壁によりそれを阻まれてしまう、それによ
り一瞬動作が遅れてしまう、

「隙ありだよ！おにいちゃん！氷爆！！」
そこに今がチャンスとみたキティが無詠唱で叩き込んでくる、
キティが無詠唱つかえるなんて、初耳だ。

見事にその氷爆が僕に直撃する、キティは自身の勝ちを確信した、
しかし、煙舞う中、僕は無傷で姿を現す。

「ええ！何で！あたったのに！！」
またも驚愕に目が見開かれる、
当たる寸前に無詠唱の同じ魔法をぶつけたのだ。

「残念だったね、キティが無詠唱使えるなんてびっくりしたけど、

無詠唱使えるのはキティだけじゃないよ？」

得意な顔をしてキティに告げる、

キティは距離をとりながら詠唱を始めようとする、

「リク・ラク・ラ「遅い！！氷神の戦鎚！！」きゃあ！！！」

先ほどよりも大きい砂煙を巻き上げ、戦鎚が振りおろされた、

土煙が晴れると、そこには気絶したキティがいた。

89戦87勝2引き分けと・・・メモメモ

育ち（後書き）

戦闘難しいです、

変化（前書き）

今回長かったので二つに分けようと思います。

変化

最近前の住んでいた場所に帰ると必ずといっていいほど、賞金ハンターが2、3人居る。

それを遠目から眺めて、思う。

やはり、今のままじゃ逃げることは出来ても倒すことは出来ない、もし高位の使い手だった場合は逃げることも出来ないだろう。

そう思った僕は最近キティが寝静まった後に魔法の練習を行う、

今行っている魔法の練習、一つが原作でフェイトが行っていた、曼荼羅模様の魔法・物理障壁だ。

これは魔法理論を組み立てていけば、簡単に出来る思ったのだが、どうして結構厄介なのだ、

魔力の調整、術式、構成、すべてが厄介でうまく出来ない。

もう一つが、こちらも原作で使われていた、キティの奥義「闇の魔法」^{エレベア}である、

こちらは流石にそう簡単に出来るわけではない、自分なりに研究したつもりだが、今のレベルでするのは無理に近い。

どちらも、まだ全然出来ていないのだが、これが完成した証には戦闘も今の3倍の強さは保障される、

キティもこっそり修行を始めたようだ・・・何をするつもりなんだろうか・・・

未だおにいちやんに勝つことの出来ない私は一つでもおにいちや
んから優位を得ようと、おにいちやんが寝静まった深夜に、魔法の練
習をすることにした、

今練習しているのは魔力で練り上げたものを剣の形状にするという、
魔法です。

これは私がオリジナルで考えたので、おにいちやんも必ず驚いて隙
を見せてくれるはずです！

でもこれはとても制御が難しいです、少し精神が乱れると形が崩れ
て霧散してしまいます、

魔力コントロールが得意なおにいちやんならこんな簡単にやって
のけるんだろうけど・・・

おにいちやんに力で勝てないなら私は策めぐらせることです！

見ててねおにいちやん！！

まあそんな練習風景もこつそり覗いてるんだけどね、

ふむ、エクスキューションナーソードか・・・まだ拙いけど形には
なっけてきていますね。

これが多分原型となるのでしょう、呪文唱えずにこのレベルなら、
後々呪文有りでこの魔法を構成したとき驚きの威力を見せてくれる

でしょう。

ちょっとやってみましょうか？

手に魔力を集め顕現させる・・・

おもったよりすんなり出来ましたね、

まだ噴出させているに過ぎませんが、これを固形にするのがエクス
キューションソードになるのでしょうか、頑張ってるようですね、
キティも。

そんな試行錯誤の日々が続いて3年の月日が経った、

いつものごとく2人で魔法練習をしていたときのこと。

突然認知阻害の結界が崩されるのを感じた、

「ええ！これどうしたのにおにいちゃん！？」

突然のことであんなに驚く、

「侵入者だ！キティ部屋から全部道具を自分の影に入れてきて！僕は
は此処で足止めするから！」

以前から考えていた侵入者の対処法の一番最悪のパターンを考える、

この結果はキティが貼ったものとはいえ、これを破壊するのは容易
ではない。

破壊できるのは多分、原作だとタカミチクラスにはなるだろう、最
悪の展開だ。

ラカンの強さ票じゃ2000クラスだろう、
今の僕達じゃ2人で倒せるかどうかのレベルだ、

「おやおや、噂の吸血鬼はどんなものかと見に来ましたがこんな可愛い少年と少女だったとは・・・こちらとしても想定外ですよ」
そう声を発したのは、黒のロープで覆われた形容をしている、まだ若いであろう女。

ごくり・・・

見た目から感じられる気、魔力もさることながら、
身に纏っている黒ロープからも高い魔力が感じられる、多分高位の
アーティファクトだろう、

「なんのようですか？・・・っていつでもどうせ賞金稼ぎでしょう？
どうします？僕らと戦うんですか？」
なるべく平静を装って、目的を聞き出す。

「私は賞金稼ぎではありませんよ？」
さも当然といった様子で、聞き返してくる、

そこにさっき用意を終え戻ってきた、キティが言った、
「じゃあ、何しにきたの？」
キティからは魔力が体外に放出されていて、髪が少し逆立っている、
多分威嚇しているのだろう。

「いえいえ私は興味があっただけですよ、幼い吸血鬼がどういう人で、
どのようにして今まで生き残ったのか、
うん、そうですね！僕と手合いしましょう！そうすれば見逃してあ

げますよ」

なにか思いついたような顔をして、手合いを申し込んでくる、

「それに乗る僕らのメリットはありますか？」

ただ乗ってしまうのも面白くないと思い、聞き返す、

「そうですね・・・特にありませんがデメリットがあります、手合いないと私が貴方達を封印でもしましょうか？」

今思いついたような、言い草だがその声色は本気そのものだ、

「2人1度にでもいいですよ？」

多分挑発しているのだろう、

「おにいちゃん私に行かせて！絶対倒してみせるよ！」

キティが僕に懇願してくる、この日常を破壊したあいつが憎いのだろう。

「キティ・・・無理だ、あいつは多分強い僕よりもずっと・・・」

「で、でも！」「頼む！！キティ逃げてくれ、今の君は転移も使えるだろう！それで逃げてくれ足止めは僕が引き受ける！」それじゃあ！前と一緒にじゃない！やだよ・・・私」

その言葉が胸に刺さる、

これじゃあ、前と一緒にじゃないか・・・

また僕はキティに心細い思いをさせるのか？

それじゃダメだ！

「・・・分かったキティ、でも2人で行こう！僕ら2人なら絶対に勝てるよ！」

その言葉にキティの顔が輝く、

「うん！！」

「そろそろいいですかね？それではこちらからいきますよ！！っと！！」

そういった女はこちらに向けて無詠唱の光の矢が飛んでくる、

「キティ！！僕が前衛を引き受ける君は大型殲滅呪文の詠唱を始めるんだ！！！」

その光の矢を障壁展開で相殺しつつ、キティに命令を下す。

「う、うん！リク・ラク・・・・・・」

「ふむいい作戦ですね、障壁が得意な兄が前衛で、殲滅系大呪文を使える妹が後衛ですか・・・」

そついうと、相手は指を鳴らした、

すると、地面から無数のゴーレムが現れる、

「鋼鉄のゴーレムです、これで後衛は呪文を唱えることができないでしょ？」

ゴーレムは後衛で呪文の詠唱を行っていた、キティを蹴り飛ばす、

「きゃあ！！つく！エクスキューションーソード！！」

吹き飛ばされたキティは、無詠唱のエクスキューションーソードを
顕現させて、ゴーレムに立ち向かう、

しかし、切っても切ってもゴーレムはうじゃうじゃ沸いてくる、

「キティ！！転移を使え！上空に逃げるんだ！」

キティに助言を出す、しかし・・・

「そつちを気にしていたら死にますよ？あなた、そんなに妹が大事
なの？」

女は僕と拳で打ち合いをしている、しかし動きが早すぎてついてい
くのがやつとだ。

「まさか私の動きについてくるとは・・・なかなか見込みがありま
すね！」

語尾とともに僕のみぞおちに女の拳が直撃する、

その後、女の連打が直撃してしまう、

「うぐっ！・・・はあはあ・・・はあはあ・・・」

息が切れる、体が痛む、だけど此処で負けたらキティは・・・

幾度となく接近戦をもちかけるが、ことごとくやられてしまう。

魔法を使おうにも詠唱すれば、殴られ、無詠唱では威力が足りない、

立ち上がれない女は僕に向けて手を突き出した。

「ほらもつとしっかりしてよ！・・・雷の暴風！！！」

呪文を高速で詠唱し、女から雷の本流が流れてくる。

「ぐああああああ!!」

体が・・・動かない!

体が麻痺して、旨く動かすことが出来ない、

「ほらほらしっかりしてよ、少し待っててあげるよー君の最大呪文でも打ってみなよ?少しは効くかもよ?アハハ」

そういった女はゴーレムを遠隔操作しつつ、近くの岩に腰をおろす、

その間も、キティは上空から詠唱呪文でゴーレムを蹴散らしている、

「うち!舐められてる。。。つくそ!!」

これで、負けられない・・・これを出したら動けないだろうけど・・・
・やってみるか!!

「リク・レク・ロ・リック・レイロック契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、」

僕の出来る最大のことはやってみせる!!

「おお!永遠の氷河か!いいねいいね最大呪文で対抗ですか!凄く興奮しますよ!!」

女は下ろした腰を浮かして、興奮に手を叩く。

「永遠の氷河!!固定!!!」

付け焼刃の新技で勝負、もし術自体が成功しなければ、これは僕の負けだ。

「つつな！！永遠の氷河の魔力が手で固定されている！！」

つく！！手が焼ける！魔力の暴走が抑えられない！！

魔力が暴走しかけそうになったとき、
キティが叫んだ、

「おにいちゃん！！頑張つて！！負けないで！！もう一人はやだよ
っ！！！！！！」

その叫びが僕の内側の魔力を引き起こす、

負けない！！

「つく！！掌握。魔力充填『術式兵装』！！！！」
大きな魔法が僕と一体化する、

「なに！固定された魔法を自らの体にとりこむだと！！？」
驚きのあまり思わず叫んでしまう。

「うあがあああああがああああああああああ
体が焼ける、精神が溶ける。」

でも、僕はあの日誓ったんだ、キティを守ると！！

その瞬間魔力が周りに大きな風を巻き起こす。

その風は砂煙を上げながら周りの木々を振動させる、

あまりの驚愕に女はゴーレムの遠隔操作をとりてしまう。
すると、先ほどまで上空に向かい攻撃を繰り返していた、ゴーレムが土に戻る。

キティは上空で僕の方を見て固まっている。

「おにい・・・ちゃん・・・」

砂煙が晴れると、そこに冷気の本流が起こる、

そこにはいつもの金髪ではなく、青い髪をした、エレオスが立っていた。

「冷装凜煉・・・本気で行くぞ！！！！」

変化（後書き）

オリ呪文ですみません、

追記

サブタイトル入れ忘れて、エラーがでて文章全部消えた・・・

此方のミスですがちょっとやる気なくなった、回復までおまちくだい

s

決着（前書き）

ゴメンナサイ色々変更しました、

決着

「冷装凜煉・・・本気で行くぞ！！！」

冷気を漂わせた青い髪のエレオス、

周りの木々はその漂う、冷気で氷始めていた。

「あは！やるじゃん魔法を自分の体内に取り込むなんて、どの程度力が上がったのかみせてもらおうかつね！！！」

その言葉を皮切りに女はエレオスに向かって走り出す、

その拳が迫っているのに、エレオスは微動だにしない。

その光景を見た、キティは思わず目を瞑ってしまった、

大きな衝撃音の後、ゆっくりと目を開け目にしたものは・・・

「つつつ！！やるじゃん！なるほどね、触ると冷気で凍らされるのかっ！」

そこにいた女は右腕のひじまでが綺麗に氷漬けにされていた。

しかし、女はだれた右腕を放置し、片腕だけで臨戦態勢を整える。

次に動いたのはエレオスだった、

エレオスの姿が急に少しだけ霞む、その時にはすでにエレオスの拳が女の鳩尾に直撃していた。

「ぐはあ!!」

女の顔が苦痛にゆがむ、

やはりその打撃が当たった部分は氷始めていた、

女は魔力の体外放出をして、氷の侵食を止める、

「はあ・・・はあ・・・」

エレオスは空気中の水を固形にして光の反射を利用して幻像をつくっていたのだ。

しかし、女も今の一撃でそのことは気が付いたようだったが、

女は凍った手を見つめた後、距離を離し、指を鳴らす、
すると女の周りに火炎の矢が30本ほど出現する、

しかし、射出したときにはすでにエレオスは幻像であった、
その矢はむなしく空中で霧散する、

「つつく!!!どこにいった!」

女はあせりに言葉を荒げる、

「動くな」

突如首元にひんやりと冷気を感じる、
後ろからエレオスが首元に冷気に包まれた、手刀を手に添えていた、

「僕の・・・勝ちですね?」

エレオスはそう宣言する、

そしてエレオスはその手を大きく振りかぶった、止めだ。

そのとき、女が小さく呟いた、

「私は・・・まけられない」

その眩きは女の黒のローブが輝きはじめる、大きな魔力の流れを感じる。

そのあまりの眩しさに思わず目を閉じてしまう、しかし、女はしっかり掴んだまま離さない、

光が収まると、

急にその女を掴んでいた感覚が消える、

急いで目を開けると、

「形成逆転だね！君は良く頑張った！」

エレオスの首に手刀をあてがう女の姿があつた、

そのまま女は僕を魔力を纏った足で蹴り飛ばす、もちろんその足も綺麗に氷漬けになる、

「っがは！！」

思いのほか大きいダメージに足が揺れ、立ち上がることが出来ない、上空に居て固唾を呑んで見守っていたキティが全力で此方に向かつてくるが、距離が距離だ、届かないだろう、

「おにい！！おにいちゃん！！」

曾於の言葉からは焦燥が感じられる。

そんな中女は片手を突き出した

「これで終わりだよ！！・・・来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え、雷の斧！！！！」

女は高らかに宣言し、呪文を唱えた。

これは、原作でネギが良く使っていた技だ。

その雷の斧はエレオスに直撃する、周りに煙が立ち込める。

「死んで・・・ないよね？吸血鬼だしね？」

女は明らかに勝負は決まったと思い、警戒を解いた

しかし、煙が晴れると、そこには無傷のエレオスと、

雷の斧であつたであろう、物質が綺麗に氷漬けにされていた、

「つつ！！」

あわてて臨戦態勢になろうとするが、凍っている片手片足がそれを遅らせる。

エレオスはそんな女に凄まじい初速で近寄り、

動かそうと思つた、無事なほうの手を掴んだ、

「今度こそ、終わりです！術式解放、氷結結界！！」

そう唱えたエレオスの前には美しい彫像が一つあるだけだった。

「おにいちゃん！！勝った！勝ったんだよ！！」
そういつて近寄ってくるキティ、

「そうだな・・・良かった・・・」

そういつてキティを抱きしめる、すでに髪の色は金に戻っており、完全な魔力切れだった。

2人でそうやって抱き合っている中

「いいねいいね！美しい兄弟愛！」

先ほどまできいていた女の声が聞こえた、先ほどまで彫像があつた場所を見ると、そこには大きな水溜りが出来ており、その上に女が立っていた、

「つつつ！どうやって！どうやって抜け出した！！」

声を荒げ聞く、此方にはもう戦えるのはキティしか居ない、かわいい妹には戦わせたくないが・・・

「まったく、君にはびつくりさせられたよ！まさか感卦法まで使われるとはね！！」

女は本当にまいった、といいながらも表情にはまだまだ余力を感じさせられる、

感卦法、原作でタカミチが使っていた究極技法だ

此方の世界に来てからお見えになるのは初めてのことで、むしろまだ開発されていないものだとおもっていた。

まさかの此処にきて、相手の隠しだまに表情に絶望の色に染まる、ふと横目でキティを見てみると、こっそり下を向いて詠唱を開始していた。

「・・・契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。」

キティ最大の呪文、それを今残っている魔力の大半をつぎ込み一撃必殺を繰り出した、

その一撃は、女を飲み込む、

全ての視界が凍り吹雪によって埋め尽くされる、

しかし・・・

視界が回復した僕らの前には、

服はぼろぼろだが、ノーダメージであろう女が立っていた。

それを見た僕らは確実な死を覚悟した。

「僕らは・・・まだ終われない！！リク・レク・ロ・リック・レイ
ロック契約に従い、我に従え、氷の女王つく！！魔力が・・・足りない！！」

魔力を形にすることができない・・・

ここで終わるのか・・・

「いやいや！ちょっと待って、白旗白旗！私は君達にもう、危害を加えるつもりはないよ？」

女は心外そうな顔をする、

白旗・・・？ここまで追い詰めておいて？

罠か？

油断を誘ってるのか？

いやここまで完膚なきまでのめしておいていまさら油断も何もない、
何が？何を狙ってるんだ？

頭の中で？が高速で浮かんでは消える、

「じゃあ・・・僕らをどうするつもりですか？」

あくまで、相手は強者此方は低姿勢でものをたずねる、

「いやね私欲で悪いんだけど、私ね実は200万\$の賞金首なの、
ほら、こないだシリオス帝国の皇帝が殺されたのは知ってる？あれ・
・私なんだ、ちょっと事情を話せないけどね、ただ自己弁護する
ならば、恐怖でいっぱい開放されたかったんだ。でね、いま私も
逃亡者なんだけど、こないだこの近くに大きな屋敷を見つけたんだ。
その屋敷にはたくさんの賞金稼ぎがいたけど、全員居なくなるのを
見計らって、屋敷とその周辺の森に多重認知阻害結界を張って、い
ま隠れ家にしてるんだ。」

女は楽しい表情で話しながらも時折、悲しそうな目をしている、

この時初めて、こいつの目が赤色とゆうことに気が付いた。

「で？それと僕らと戦うことが関係あるんですか？」

つい苛立ちが顔に出てしまう。

「あそこの屋敷大きいし、一人で住むのはさびしいのよ、だから同
居者を探そうかなって思ったんだけど、やっぱり私犯罪者だし、一
緒に住むのは無理かなと思ったんだけど、同じ賞金首ならっと思っ
て、変装してギルドにいつてみたんだ、そしたら、用紙には賞金首

がいつぱい移されていたの、でも、皆ごっついおじさんばつかでも賞金が低い、でもそんな中で賞金高めで美男美女の賞金首が！しかも50万\$と60万\$の2人、これは！！と思つて探してみたら屋敷の近くにいたから、誘つてみたの、一緒に住まない？」

女は話し終わると、俺達の反応をうかがった、

「ちよつとまつてください！僕らが戦つた意味は何ですか？」

「そつだよ！私達必死だつたんだよ」

僕らが口口にそついうと、

女は悪びれもせずに、

「いや、テストも兼ねて、もし私が居ない間に襲われて、自衛能力がなかったら死んじゃうし」

「テスト？テストのためだけに僕はあんな死ぬような思いをさせられたんですか？」

もう怒りがとめられない。

すると急に女がしおらしくなり、

「そこについては素直に謝る、ごめん、でも理由話してからじゃ本気でやってくれなかったでしょ？」

急に誤られると調子が狂う。

「そう・・・ですか・・・まあいいです、同居の件ですが・・・僕達にメリットがありません、お断りします、」

これは当然の反応だろう。

急に現れてぼこぼこにして、一緒に住もうなんてムシが良すぎます、

「そつか、メリットか・・・メリットは二つあるよ！一つは、屋敷！いまの屋敷は元は貴方達の家、屋敷にはかえりたいでしょう？」

それはとても魅力的だ、僕はあの家になんの未練もないが、キティは違う、あの家で培ってきた思い出やそれに関する品々があるのだから、横目で見てみると口をつぐんでいる、

ここはキティを尊重すべきだろうか、

「そしてもう一個は、君達その魔法や体術は我流でしょう？私の元にきなさい、私が教えてあげることが出来ます」
女は胸を張って言った、

しかし・・・

「貴方の先ほどの戦闘で分かりましたが、感卦法には目を見張るものはありました、私達は気が使えません、そんな貴方に魔法を教えることが出来るのですか？」

これはやはり至極当然な質問だろう、

「ふむ・・・そうですね、それじゃあ質問します、貴方が私の首に手刀を添えたとき、どのようにして、脱出したと思いますか？」
女は急に真剣な表情になり僕に尋ねた、

「それは、貴方の着ているその黒のローブの特殊能力でh・・・・・・
！あの時行われた黒のローブは魔力の流出のみ、とゆうことは・・・・
起こった現象は魔力の移動！！」

驚いた、今気づいてみれば・・・

「そう、私が行ったのは、ローブに封印した自分の魔力を少し戻しただけです、そして自分で空間状況転移を行いました」

空間状況転移、

空間の状況をそのまま空間との入れ替えを行う、恐ろしく高い精度と、煉度がなければ使うことすら出来ない、

この人は！！

「メリットは分かってくれたかな？」

また先ほどの表情に戻る、

ちらりと、キティのほうを見る、キティはゆっくりと頷いた。

「わかりました！条件を飲みます！その代わりに血の制約をしてください！僕らには同意の戦闘以外では危害を加えないと！」

僕は高らかに言った、これは決意だ、この人の下で強くなる、

魔方阵を描く

「OK！それじゃあ血の制約を、我が名はリリア、盟約に従い此処に血の制約とする」

魔力で書かれた魔方阵に血をたらす、

すると、光が真つ赤に発光する、

そこに僕ら兄弟が手を添え制約を誓った。

顔を上げるとリリアの手があった、

「2人ともよろしくね！」

そして僕達はリリアの家、いや、僕等の家に帰ってきた。

主人公設定、少しだけ

エレオス

12歳 身長ネギより少し高い 目の色、髪の色ともにキティと一緒
痩せ型 イケメンとかわいいが 4：6って感じ

リリア

??歳 美人 髪の色 白 目の色 赤

普通体系 身長 170くらい

決着（後書き）

色々設定変わってすみません
感想もらえると筆がスピードUPします、

修行（前書き）

もう、色々オリ設定だしてゴメンナサイ。

修行

僕らが家に帰ってきてから、まず始めに行ったことは掃除・洗濯・炊事・・・etc

といったように家事ばかりやらされていた。

そんな日が10日続いた僕らは、リリアに魔法の修行を行って欲しいと頼みに行った、

リリアは書斎で横になっていた。

「リリア！いつになったら魔法の修行を行ってくれるんですか！？」
その言葉にリリアはめんどくさそうに此方を向いた。

「そうですよ！私達此処に来てから家事しかしてませんよ！？」
キティもいい加減魔法をやりたいようだ。

「これを外してください！この腕輪つけてからこれっぽっちも魔力ができませんよ！！」
そういつて、腕を掲げる。

そこには綺麗な装飾が施された、腕輪が付いていた。

同じようにキティも腕を掲げる、もちろんその腕にも同じ腕輪が付いている。

この腕輪は此処に来た初日にリリアが嵌めてって言ったものだ、つけてみたはいいが付けた途端に外れなくなってしまった、しかも付

けると同時に体から魔力が失われたかのように魔力がこれっぽちも湧き出なかった。

「そうかぁ・・・もお１０日かぁ・・・」
いかにもやる気なさに、返事をする。

そしてリリアはおもむろに立ち上がり、自分の頬を打つ、

「よし！！そろそろ修行しますか！！」
その目には決意の表れを感じる。

「２人ともついてきて！」
そういつてリリアは本棚に向かって歩き出した。

そして、三段目の左から４番目の本を押し込むと本棚が動き出し、地下へ続く階段が現れた。

「「おお・・・」」
僕は思わず感嘆の息を漏らした、

つて・・・この人は勝手に僕らの屋敷を改造したのか・・・

暗い階段を降りていくと、そこには一つの玉があった。

「これは・・・魔法球？初めて見ました・・・」
僕はこれを原作の知識で知っているが、この世界に着てからは見たことも聞いたこともない、

原作の知識がなく、これがどういった代物か分からないキティは顔から？マークが出ていた。

「おおよく知ってるね！この世界じゃ多分5個とない代物だよ？逃げてくるときに一緒に持つてきちゃったんだよ」

そついう、リリアはこれから起こるであろう修行を前にワクワクしている。

「エヴァちゃんは、この事知らないみたいね」

その言葉にキティはこくりと頷く。

リリアは最初はキティちゃんと読んでいたが、なぜだか知らないがキティがそれを拒んだ。

やはり、子猫はいやなんだろうか・・・

キティのその反応に満足げに頷き、リリアは得意げに説明し始めた。

「この中はね、端から君達が全力で駆け抜けたら、3時間かかっても端にたどり着けないようなくらい大きいのに、しかもこの中は時間の流れが緩やかで、此方での1時間があつちでは12時間なの。だから修行にはうってつけの場所って事かな」

その言葉に、キティは信じられなさそうにリリアを見つめた。

3時間ってそんだけかよ！？って思つかも知れないが、僕達が全力で走れば3時間600kmぐらいはいくだろう。それでもたどり着けないって事はそれだけ広大って事だろう。

「信じられなさそうだね、それじゃあ入ってみようか、あ、手を当てれば入れるから」

そついつて、リリアは魔法球に手を当てると同時に姿が消えた。

「なんか・・・凄いね、魔法ってこんなことも出来るんだ・・・」

そう呟きながら、キティが手を当てた、

それに連なり僕も手を添えた。

視界が変わり、目を開けるとそこには壮大な空の上に居た。

此処は、空中に浮遊する大きな城だった。目の前の細い道の先には、大きな城が浮かんでいる。

「びっくりしたー？だよね！私も最初此处入ったときびっくりしたもん、まあ今はなれちゃったけど」

その声は城の方から聞こえてくる。姿は見えないがリリアだろう。

隣にはキティが目を丸くして驚いている。

僕とキティは二人並んで城に向かって歩き出した。

城の中は中世のヨーロッパの様式だった、

城のエントランスホールに入る、そこにはリリアが仁王立ちをしていた。

「ようこそ！我が城へ！つつつても盗品なんだけど・・・」
そういつて少しおどけたな様な表情をする。

僕達はその勢いに少々押されながらも、
周りを伺った。

周りには空間の歪みがあった。その歪みは全部で12個あり、その一つ一つに違った景色が映し出されていた。

「驚いてるかい？この空間の歪みはね、映し出されている空間に飛ばしてくれるんだよ」
その言葉に、いままで黙っていたキティが一つの空間に近寄ってみる。

近寄ってみた空間の中には、砂漠のような空間が映し出されている。

そーっと触ってみよう指を伸ばすキティ、

触れようとした瞬間リリアが叫んだ。

「まって！そこはまだ君達には早いかも！」

びくつと反射的に指を引っ込める、そしてまた僕の横に戻ってくる。
・・・ああ可愛い。

「僕達はどの空間に入ればいいのです？」

僕はそろそろ修行を始めたいと思い、口を挟む。

「えっとね・・・此処此処！今日はね此処にはいつてもらうつよー！」

そういつて指を刺した先の空間は真っ白で何もない空間だ、

僕らはその空間をじっと見詰める。

そんな僕らにお構いなしにリリアは言った。

「着いてきて！」

リリアが空間に飛び込む、それに続いて僕らも意思を固めて飛び込んだ。

やはり思ったとおり、中は何もない空間だった。

僕らはリリアの言葉を待つ。

「君達はね魔力を全部使うことが出来てないんだよ、多分誰からも教わらなかったせいかな、魔力回路がすこし乱れてるね」
その言葉を聴いたキティは僕のほうを少し見る、

「ごめんよ・・・キティ僕が魔法回路開かせたから・・・」
申し訳なく、頭がうなだれる。

「いや、気にしないでおにいちゃん！もし開かなかつたら私もう死んでるかも知れないし！おにいちゃんには感謝してるよ！」
そんな僕にキティはあわてて慰めに入る。

「まあまあ、そこまでにしといて、んで今日は魔力の全開放をやっ

てみたいと思います、少し荒っぽいやり方になっちゃうけどね」

おもむろにローブを羽織り、リリアは言った。

急にローブが黒光りを始める、膨大な魔力が渦巻き、リリアの体を包む、

その圧倒的な気迫にゴクリを生唾を飲み込む、横目でみたキティも同じ様子だ。

「本当は君達もこの程度魔力なら保有しているはずなんだ、しかし出せていないだけ。いま君達が使っている魔力は総量の30%程度だから全部を引き出す、その腕輪は君達の魔力を封印すると共に、10日間君達の潜在魔力を刺激し続けた、腕輪をはずした途端に全魔力が開放されるだろう、それを自分で感じるんだ、一度味わってしまえば、後には簡単に引き出せるようになる」

その言葉は真剣そのものだ、さっきまでのリリアとはまるで別人だ。

僕ら2人は視線を交わす、2人とも決意を宿した目だ。

「よし、それじゃあ最初はエヴァちゃんからだ、ゆつくりと腕輪をはずして、無理にあふれる魔力を抑える必要はない全てを身に任せるんだ」

リリアもどことなく緊張した様子だ、

「わ、分かりました、やってみます」

そういつてキティは腕輪に手を添えた。

一瞬の静寂が空間を包み込む。

そして、ゆつくりと腕輪をはずす。

その瞬間キティから膨大な魔力があふれ出す。

「きゃあああああああああああああああああああああ
ああ」

キティの悲鳴が木霊する、

僕は強く拳を握った、

キティの魔力は様々な形に姿を変えて、踊り狂う。

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・」

その姿はとても苦しそうで見えていられない。

でも僕は目を離さなかった。

そして、その状態が暫く続きキティが倒れる。

僕は急いでキティに近づく、キティは寝息を立てていた。

「大丈夫眠ってるだけだ、まさか魔力の放出だけで終わると思わなかったよ、普通は暴走をして、オーバードライブを起こすと暴れだすと相場が決まってるんだけどね、彼女は強い子だ」
そう言ったりリアは安堵の息と表情が見て取れる。

僕はキティを背負って、この空間から出る。

そして、城の二階のベッドに寝かす。

僕はゆつくりとキティの頭をなでた、

「強い子だね、キティ」

そう言い残して僕は先ほどの空間に戻った。

「さて、問題は君だ、君は潜在魔力量は彼女より多い、その分君の魔力暴走も凄い規模になるだろう、覚悟はいいかい」

「はい、覚悟は出来てます、キティがあんな頑張ったのに、僕だけ頑張らないわけには行きません」
そういつて、腕輪に手を掛ける。

「あ！ちよつとまって、こっちにも準備させて」
そういつと彼女は目を瞑り、右手に魔力、左手に気を集中させる。

感卦法だ、リリアもそれだけ本気なのだろう。

「OK！それじゃあ健闘を祈る」
そういつてリリアは地面に手を添える、すると地面に魔方陣が現れる。

その魔方陣の中心で僕は腕輪に手をかけた、

「いきます！」
そういつて一気に腕輪を抜き去った。

その瞬間さっきのキティも凄かったかがそれよりも激しい規模の魔力が吹きあれる。

「うがああああああああああがあああああああああああ
熱い熱い、体が燃える、焼ける・

魔力が抑えきれない！！

その瞬間僕の髪はまた青色に変わっていた。

その様子を見たりリアは驚愕に目を見開く、

「まずいぞ！！こんなに魔力がなじむなんて！！魔力が体になじみ
すぎて、体が自動的に魔力を取り込んでる！！」

そいうが否やリアは地面に手を付ける、

「うがああああああ阿あああいあああたあああいあ」

「ごめん、一時おとなしくしてて、血廻結界！！」

その一言で先ほどの魔方陣が、赤く染まり、光を発し、筒状の結界
がエレオスを包み込む。

「まさか、これを発動させられるとはね」

顔から冷や汗を流しながらリアは息をついた、

筒状に伸びた結界の内側からエレオスの叫び声が聞こえる。

「うがあああああああああああああああああ」

その叫びが段々強くなっていく

「あああああああああああああああああああああ
ああああああああ」

その叫びが聞こえた。

「う、嘘だろ！！此処までか！！」

結界の下のほうが段々凍り始めていた、そのスピードは叫びが大きくなるに連れて、あがっていく。

そして、絶え間なく魔力を注ぎ続けるリリアの奮闘むなしく、
天まで伸びた結界は、氷の塔と化した。

「うわああああああああああああああ！！！！！！」

最後に大きな咆哮が起こり、氷の塔は粉々に砕け散った。

その先には、まるで獣のような目をしたエレオスが立っていた。

修行（後書き）

また二つに分けます。
感想・・・まってる。

修行2（前書き）

今回とても短いよ！

修行2

獣の目をしたエレオスは、姿が確認されると同時に襲い掛かってきた。

「うがああああああああああ」

叫びながら迫ってくる、その姿はまさしく獣だ。

「っち！！厄介なことになったねえ！！こうなったらとことんやっ
たるよ！！」

そういつてリリアは応戦する、そのスピードはエレオスには劣るが、スピーディに最小限の動きで済ませることで、その差を補っている。

1合2合と打ち合っていく中、攻撃が当たらないと思ったのが、エレオスは距離を離れた。

「ああああああああああああああああああ」
その叫びと共に地面が凍り始める、

「これは・・・なにを？」

リリアもその真意を測りかねているようだ。

目に見える範囲全ての地面が氷に覆われた。

リリアは、氷に触れててはいけないと思い、地面から足を浮かす。

「ああああああああああああああああああ」

咆哮はとまらない、さらに魔力の奔流が流れ、その全てがエレオスの体内に取り込まれていく。

「そうか・・・この暴走は闇の魔法ってやつのせいなのか・・・」
体に取り込まれる魔力を見て、リリアは一人呟いた。

そして、エレオスはまたも地面をける、

リリアは魔力切れを狙っていて、倒す気はない。

さらにいえば、理性を失って詠唱すら出来ないエレオスを倒すのは容易とまではいかないが、可能だろう。

しかしそれをしないのは、それを実行してしまえば、エレオスが大怪我することは間違いないだろう。

「いつまで続くんだい？この魔力？」

エレオスと打ち合いながらも余裕のように呟く、やはり理性がない分、攻撃が単調だ。

あわせるのは簡単だろう、感卦法も使っているし、触られても凍ることはない。

丁度30回目の打ち合いが終わったとき、エレオスは不意に地面を足で叩いた。

「つつつ！！！！」

氷で覆われた地面から鋭利な棘が無数に出現したのだ。

リリアは寸での所で交わすが、それでもこの魔法・・・使われたってことは、少しはオーバードライブ中に考えることが出来ているようだ。

これは少し厄介だ・・・

心の中でそう呟き、リリアは再びエレオスに向きなおした。

「いまからすることは先に謝っておく、吸血鬼の君なら大丈夫だとは思う、死ぬことはないだろう」

そういうと、リリアは感卦の気を手に集中させた、体から感卦の気が消える、

その隙を見逃すほどエレオスも甘くはないだろう、

「うがああああああああああ」

叫びと共に、腕に大きな氷の爪を纏い襲い掛かる。

しかし、一瞬大きな風が起こり足を止めさせてしまう。

「感卦法・衝！！」

すると、感卦の気が全て右腕に集中した。

その一撃を、エレオスに向かい走り始める。

エレオスは、それに大きな氷の爪で向かえつつ。

二つが交わる。

大きな衝撃音の後、両者は

どちらも健在で立っていた。

「ま、まさか此処に来てこんなことが!!」
そういったリリアの手はさっきの技の代償なのか、ぼろぼろになっていた。

一方エレオスは、先ほどまでの叫びもなくなり、無言で立っていた。
そしてふらふらとよろめいた後、大きく倒れた。
魔力切れだろう。

その様子を見た、リリアは安堵の息を漏らす。

まさか、あんなことが出来るなんてね・・・

あの一瞬で先に手を出したのはエレオスだった、その大きな氷の爪を感じ卦の気を纏った右手で粉々にした後、大きく振りかぶり、エレ

オスの胸めがけて右腕を振り下ろした。

しかし、そこでエレオスが行ったのは、後ろに倒れながら手を付き、地面にあった氷を全てで盾にしたのだ。高密度の圧縮された氷の盾だった。

その証拠に大きな衝撃音とは、氷が砕けた跡で、先ほどまで地面を覆っていた氷もない。

最後にした、氷の盾・・・特殊な形をしていたな・・・

そう思いながらも、リリアはエレオスに近寄った。

エレオスの顔を見てみると、まるで年相応の可愛い寝顔がそこにあった。

エレオスを寝室まで連れて行く。

兄弟仲良く、同じベットに寝かせ、自分も書斎に戻る。

「ふう・・・今日は色々疲れたなあ・・・まあ2人の魔力総量も見れたし、明日から修行していきますかな」

そういつて、椅子に座り寝息を立てていた。

目が覚めると、目の前におにちゃん顔があった。

「~~~~~ツッ!」

声にならない叫び声を上げ、ベットから離れる。

心臓の動きが早い、兄弟兄弟と自分に言い聞かせて、その場から離れた。

書斎に行つてみると、リリアも寝息を立てて居た、あの後何があったのか非常に気になる・・・

そして、2人とも寝ているし、非常に暇だ。

何しようか？

私は昔の自分の部屋に行くことにした、色々改造されているこの家だが、私の部屋は古ぼけてはいるが、どこも変わった様子はなかった。

しかし、部屋の真ん中に一体の人形が不自然に置かれていた。

その人形は私がいつも、一緒にいた、チャチャゼロの人形だ、母親に作ってもらったのだ。

そう、思っていると何故か目から涙が溢れ出してしまった。

「おかあさん・・・おとあさん・・・」
声を殺して泣いた。

少しして、泣き止んだ私は人形を抱いたまま寝室に戻った。
なぜだか急におにいちゃんの横に行きたくなったのだ。

まだ寝たままのお兄ちゃんを起こさないように、私は横に入って、再び寝息を付いた。

「おにいちゃん・・・」

目が覚めると、キティの顔が目の前にあった。
その手には、どこかで見たような人形が握られていた。

えっと・・・これは・・・そう！チャチャゼロだ！！

そっかそっか、これがあのドールマスター言われる由縁の人形か。
僕は、原作の最強クラスのキティを再現したいと思う、修行が始まったことだし、闇の魔法を習得後キティにも教えるつもりだ。

その後は系か・・・まあ今のレベルでも大抵のやつには負けないけどね。

そう思った僕は、大して何をするわけでもなく、もう一度眠りに付いた。

厄介な奴を呼んでしまったなあ・・・

まさか、あそこまで強いとは思わなかったな、

50年もすれば私を追い越すかも知れん。やっぱ原作キャラはつよいな、

私も頑張ろう、負けないように！！

それと・・・原作には居なかったが、あの兄のほうは一体・・・？

まあどちらにしろエヴァちゃん以上に輝く原石だろう、原作の時期を生きたかったけどしょうがない、もう少しあの2人を見ていいようか。この体も限界は近い。

修行2（後書き）

なんか、オリ設定オンパレード！

3万アクセス、5000ユニットありがとう

感想1・・・orz

契約（前書き）

色々、時間が掛かりました。
難産・・・

契約

僕が暴走した次の日、リリアは本格的に修行を始める気になったようだ。

それと、目が覚めたらキティの横にチャチャゼロが居た。もちろん、喋るようになって。

「ヨオ御主人ノ兄貴！俺ハチャチャゼロダ！コレカラ宜シクナ！」

このチャチャゼロは、起きたリリアが寝室でチャチャゼロを抱いているキティを目にして、それをドール契約させたようだ。

「宜しくねチャチャゼロ！僕のことはエレオスでいいよ」
少ししゃがみ込んで握手を求める。

「ワカッタ！宜シク！エレオスノ兄貴！」
そういつて、小さな手で握手を交わした。

リリアの修行は過酷を極めた。

まず僕が修行したことは、無詠唱での闇の魔法だ、発動までの時間が長い闇の魔法は従者の居ない僕には致命的だ。キティのように、人形でも従者にすれば？といわれたのだが、なんかキアラと違うので遠慮しておいた。

そのため、攻撃の最中でも即刻魔法を取り込めるような修行だ。

これが、酷くつらい、失敗すれば魔力が暴走して体の部位が内側からバーンとなってしまうし。

それでも、僕は諦める気はありませんか。

キティの修行は、系の操作の修行だ、

少しでも原作に近づけるように、後でリリアに進言しようと思っていたのだが、キティが自らリリアに進言してみたかった。

その間にも、魔法の修行、ドールとの修行をしている、

各々の特訓から1年後、リリアの提案により僕らは手合いをする事になった。

「勝負は、エレオスは攻撃なし！エヴァちゃんは系のみ、2人とも魔力での身体強化のみ、エヴァちゃんに限っては系を体の一部にみなします！いいですか？エレオスが10分間エヴァちゃんの攻撃を一度もあたらなければ、エレオスの勝利になります」

その言葉に僕らはお互いに視線を交わす。

「おにいちゃん！今日は負けないよ！」

キティはやる気満々な様子だ、それもそうだろう今までのキティの戦績といえば、90戦86敗4引き分けと、一度も勝った事がないのだ。

そして、この手合いは悠に8ヶ月ぶりの手合いなのだ。

「ああーそれとね、勝った方は負けた方に一個だけ言うこときいてもらえる権利があたえられます」

これもキティをやる気にさせている原因だ

キティ・・・勝ったら僕に何をやらせるつもりなんだろう・・・

「それじゃあ、始めるよ！」

その言葉と共にリリアは指をパチンと鳴らす、

すると、3人ともまたあの何もない空間に転移した。

リリアは、2人を交互に眺めた後、大きな声で言った。

「それじゃあ、始め！！！」

キティから魔力があふれ出す、それは僕も同じだ、

キティの体に魔力があふれきると、糸がどこからともなく僕めがけて飛んできた。

5本の糸がいつせいに僕に襲い掛かる。

「エレオスノ兄貴ヤルジャネエカ！」

全ての糸をよけきった僕を見て、チャチャゼロは言った。

「そうだね、エレオスは流石だよ、今のエヴァちゃんが勝つのは厳しいかも知れない」

「おにいちゃん！やっぱり強いね！！」

息を切らしながら、キティが僕にいう。しかしその目にはひとかけらの諦めもない。

時間は後1分か・・・

「キティも此処までやるとは思わなかったよ！」

この短い時間の中でも何度かヒヤツとさせられる場面はあった。

「でも、これで決めるよ！！」

そういうと、キティは手に引く糸全てに魔力を込める。

僕もそのキティを見て、構えを構える。

キティの糸は、基本敵の死角からの攻撃が多い、

「いくよ！！」

キティの指から無数の糸が放たれる。

1本・・・2本・・・

自分の後頭部と、足目掛けて飛んできた二本を避ける。

魔力の通った糸は、魔力の移動が上手ければ上手いほど、自由自在だ。

しかも、通っている魔力が大きければ大きいほど、切れ味は増す。

3本・・・4本・・・

避ける、避ける・・・

つく！！2本見失った！！

この攻撃を常に相手の糸に注意を配らなくてはいけない、キティ程のレベルの使い手となると指を見ていても、まったく反対からの糸がくるなんてざらな事だ。

後20秒！！

6本・・・7本！！！！

7本目を避けたのはもう、直感だ。

キティが放った糸は全部で8本の筈、一度かわした糸を再びかわすのは僕にとっては容易なことだ。

7本の糸を華麗にかわしながらまだ見ぬ8本目の糸を警戒する、

後7秒！

そのとき自分の周りに円を描くように、8本目の糸が現れた。
その輪が急速に小さくなる。

うち！！危ない！！

そう思い咄嗟に空中に飛ぶ、
後4秒！！

「おにいちゃん！！チェックメイトだよ！！！」

空中に飛んだ僕目掛けて、キティは手を上げる。

7本の糸が僕に襲い掛かる。

僕は咄嗟に空中に、足場を作り回避行動をとる。

後3秒！！

1本！2本！3本！4本！！！！

目にも留まらぬスピードで糸を避ける。

後2秒！

5本！6本！！7本！！！！！！

全ての糸を避け切り、回避行動のさなか、キティを見た。

キティは笑っていた。

後1秒！

その瞬間背後から魔力を纏った糸が、襲い掛かる。

つな！！9本目の糸！！！！

避け・・・切れ・・・な・・・

「そこまで!!」

リリアがそう叫ぶと、全ての動きが止まった。

リリアは、一息置く。

「勝者エレオス!!」

そうリリアがいうと、キティは顔を俯かせ負のオーラを撒き散らす。

「うう・・・また負けた・・・私は一生勝てないのだろうか・・・」
ブツブツ

この落ち込みぶりはまさしく8ヶ月振りだ。

「いや、キティ、リリア、僕の負けだよ」
そういうと、2人とも僕の方を見る。

僕はその視線を糸に向けるように、指を指す。

僕の意図に気が付いた、リリアは納得の表情だ。

「そうか・・・すまないな勝者キティ!!!!」

未だに状況を飲み込めない、キティは顔に？を浮かべる。

「キティ見てごらん」

そいつは僕はきていの9本目の糸を、目の前に持ってくる、

その9本目の糸は、一部が凍り付いていた。

「凍り付いてるって事は、僕にあたったっ「やったああ！私の勝ち
！？」って・・・事だよ」

喜びのあまりキティは両手を挙げて、喜ぶ。

これだけ、喜ぶなんて、初めて勝ったのがよっぽど嬉しいのだろう。

「それじゃあ、手合いはこれで終わり、明日から修行に戻るからね
！」

そういつて、リリアはチャチャゼロと共に、この空間から去った。

「あ！賞品は2人で相談して、勝手にやっというてー」

「ガンバレヨー御主人」

そう言い残して。

その言葉を聞き、僕は意思を固める。

「しょうがない、敗者は僕だ、一個だけ何でもいっことききますよ
！」

何をされるのだろうか・・・

まったくいつていいほど、予想がつかない。

すると、その言葉にキティは顔を赤らめる。

「えっと・・・その・・・」

何かのためらいが感じられる。
よっぽどいい難い事なんだろうか・・・

幾許かの時間が立ち、キティは意を決したように、言い放った。
「・・・私と！！私と・・・か、仮契約してください・・・」
そういうと、キティは顔を両手で覆う。

よかった、想像では僕が酷い状態だったのに。

「仮契約？僕なんかでいいの？」
一応同意を求める。

「うん！おにいちゃんでもいい・・・、おにいちゃんがいい！！」
そういつて、顔を上げる。

「キティがいいなら、全然かまわないよ」
僕はそう言いながら、仮契約の陣を書き始める。

「えっと・・・確認するけど、僕が従者でいいよね？」
こくりと頷く。

キティは、どこことなく顔が赤い。

魔方陣を書き終えた僕は、中央に立つ、
「それじゃあ、しよっか？」

そういつて、キティを引き寄せる。

キティの顔は今にも爆発しそうな程、赤くなっている。

やはり、初めての契約だから、緊張しているのだろうか？

「そ、それじゃあ！！よろ、よろしくお、おねがいしまつ！！」

僕はキティの頬に手を添えて、やさしくキスをした。

仮契約！！

出てきたカードは、徳性が希望、方位は北、色調が銀色、星辰性は彗星の、

漆黒の指輪を右手に5つ付けた、エレオスのカードだった。

「これが・・・これが、私とおにいちゃんの・・・きゅう
キティはこのカードを見るなり、気絶してしまった。

やっぱり、さっきの戦いで疲れているのだろうか？

倒れたキティを寝室で寝かせた後に、
もう一度、この空間に戻ってきた、戻ってくるときにリリアも付い

てきたが。

「へえ・・・仮契約ねえ、いつかはするとはおもってたけどね」
さつきから、リリアがぶつぶつ何かをつぶやいている、

少し、訝しげにリリアを見て、その後仮契約カードをつぶさに見る。

そのカードを見た、リリアは感嘆の声を漏らす。

「ふむ、結構レアなカードじゃないか・・・色合いが銀とはね・・・」

「

そんな、リリアはほっておいて、僕はアーティファクトを召還する。

「来れ（アダット）」

そう言ったと同時に、光を放ち僕の指に5つの指輪が装着される。

指輪一つ一つに強大な魔力を感じる。

「結構、珍しいね！指輪型のアーティファクトってのは、結構凡庸だけど、黒を貴重としたアーティファクトってのは中々ないよ！」
リリアもどことなく興奮した様子で、僕にアーティファクトの説明を行う。

「やっぱり、説明書は着いてませんか・・・使い方が分かりませんね」

色々、試行錯誤してみるが、何も起こる様子はない、

称号が関係するのかな？と思ったけど、称号は「永遠の守り人」やはり、関係なさそうだ。

「まあ、おいおいと解き明かしていくとしますか」

そういつて、僕はカードをしまっ、もちろんアーティファクトは出したままだ。

リリアはその様子を見て、

「いいのかい？ 分からないままじゃ色々つらいと思うんだけど？」

「まだ、大丈夫だよ、修行の邪魔にはならないように、一応特訓もしますから」

僕は、また一つ力を得た。

「永久と悠久の輪」

徳性 希望

方位 北

色調 銀色

星辰性 彗星

称号「永遠の守り人」

5つの黒い指輪が右手についている。

契約（後書き）

次で大戦編になるかもしれないよ。

時流れ（前書き）

あれ・・・やっちまっ
たぜ

時流れ

アーティファクトを手に入れてから、僕ら兄弟は本格的に修行に力を入れた、

たまには手合いもしながら、毎日の気絶して眠るように修行をした。ちなみに手合いは523戦479勝14敗30引き分けた。負けた14敗の内、制限勝負は12回だ。たとえば手を使わない・魔法を使わない・一步も動かないなど・・・

基本僕の方が強いので、勝つのは当たり前のことなのだが・・・

まあそんな感じで修行開始から30年の月日が経ったんだ。魔法球に出入りしていた僕らにとっては100年程の月日が経っただろう。

リリアは姿形はちっとも変化していない。

そして、別れの日は突然にやって来る。

いつものように、朝起きて修行をしようと移されている空間の前に

立って考えていた。

今日は、どこの空間にしようか・・・
砂漠はこの間全凍結したばっかだし・・・
雪山は僕にしたら絶好の空間だし・・・
闇の空間は吸血鬼にしたらねえ・・・
水・・・炎・・・雷・・・光・・・

大体一通りやったしなあ・・・

よし！無空間で行こう！

そう決めて、エレオスが無空間に手を伸ばした。

そのとき、後ろからリリアの声がした。

「エレオスちよつと待て」

何故か真剣な声なので、疑問に思いつつも振り返ると、
そこには、正に完全武装とでもい wanna ばかりの格好をした、リリアの姿があった。

指には魔法発動体、来ているロープはいつもの黒ではなく真っ白なロープで、
腰にはいくつもの魔法道具が刺されている。

「ちょっとエヴァちゃんを連れてきて欲しい、その際完全武装するようにいってくれ、そして君も部屋に戻って、武装してきてくれ」
声からは緊張が感じられる。

「なにをするんですか？」

僕はそう問いかけた、僕やキティが完全武装となると、余程のことだろう。

「全ては集まってから話す」

そう一言言つとリリアは無空間に入ってしまった。

その真剣さを不思議に思いながらも、僕はキティの眠る寝室に向かった。

「キティ起きて」

キティを左右に揺らしながら、やさしく言う。

寝ている姿は、とても吸血鬼とは思えない少女だ。

この子を守る為にと修行を続けていたが、今は守る必要がないほど強くなってしまった。

「んう・・・おにいちゃん・・・おはよう」

半眼で目を擦りながら起き上がるキティ、完全に覚醒するまでには少し時間が掛かるだろう。

しかし、今日はそんな暇もなさそうだ。

「おはようキティ、今日はリリアが何かするみたいなんだ、急いで準備して欲しいんだ」

「あ、チャチャゼロもつれてきてね、リリアが完全武装してこいつで言っただし」

その言葉の意味を受け取ったのか、キティは急いで用意し始める。

「用意が出来たら、あの無空間の前で待ってて欲しい」
そう言い残して僕はキティの部屋を出る。

さて・・・僕は何を持っていこうか、
完全武装といわれても、僕が装備として使うのは自分の魔法と肉体
で武器はあまり使わない。
使わないだけで使えないわけじゃないのであしからず。

僕が手に取ったのは、魔法符と魔法発動体、後は仮契約カードだ、
これがあれば、僕は遅れを取らない、リリアにでも・・・

無空間の入り口に行くと、すでにキティが待っていた。

「今日は何があるんだろうね・・・こんなに一杯の魔法具つけたのは久しぶりだよ?」

そうやってキティは、自分の持っている魔法具を見せる。

その魔法具の数々はどれをとっても最高級品だ、糸一つとっても、魔力が通りやすく、丈夫で尚且つ細くて見えにくい、その中には魔力を通しただけで、完全に視界から切り離される糸すらある。

「僕もリリアが何をするのか分からないよ、でも完全武装するって事は相当なことじゃないかな?」

思案した後、キティは深く頷く。

2人視線を交わした後に僕らは、同時に無空間の中に入った。

相変わらず何もない空間の中央にリリアは仁王立ちをして待っていた。

その様子からは決意すら感じられる。

その姿を見て、僕は嫌な予感がしたんだ。

最初に口を開いたのはリリアだった。

「2人とも、一番最初に言うことがある」「私が君達に魔法を教えるのは今日までだ、もう教えることがない、そして君達は強くなった

そして、私が君達と一緒に暮らすのも今日までだ」
その言葉に僕ら2人は目が丸くなる。

「えっ！！なんですか？これから一緒にじゃないんですか？」
リリアの言ったことが嘘だといわんばかりにキティはリリアに説明を求める。

僕もその言葉には同意だ、急にそんなこと言われても。

「君達も知っている通り私は人間だ、もう寿命が近いんだ。今は若い姿形をしているが、こう見えても120歳は超えている」
その言葉は僕らに衝撃を与えた。

いつも僕ら3人で暮らしていた成果、この変わらない姿が普通だと思えるようになっていた、

良く考えても見れば、僕らは吸血鬼、永遠の命があり、不老の存在だ、

しかし、リリアは違う人間で有限な存在だ。

「でも！！リリアは・・・」

キティは叫ぶがその言葉は後には続かない。

「だから、私は決めたんだ！私が君達を縛るわけには行かない、だから今日で此処を去る、最後にやりたいことが一つあるからね、私が出て行った後、この魔法球や、屋敷は好きにしていいい」

その言葉には決意が感じられ、僕らの言葉をさえぎる。

「そして、私が最後に君達にしてあげられることは、君達との全力の死合いだ、それと、これが終わったら君達は旅に出ろ、そして世界を知るんだ、そうすることで君達はより強くなる、その際は一人でだぞ、2人では甘えが生じる、そしてこの紋章が消えるまで2人

とも一人で世界を知るんだ」
そういうと共に、僕の右手と、キティの左手の甲に複雑な紋章が現れる。

僕らが2人で離れて・・・？

僕が強くなったのはキティを守るためなの？

しかし、キティはもう強くなった、自らを守れるくらい、だから、キティは世界を知らないといけない、僕という、甘えから抜けさつて。

そう考えると、胸が急に締め付けられるように苦しくなる。

しかし、僕は此処で決断しなくてはならないんだ。

キティのためにも・・・リリアの思いのためにも。

そう思ったのはキティも同じようだ、今の自分が安心しきつた環境に居るのはキティも分かっている。

少しなみだ目になりながらも、キティはゆっくり頷く。

その瞳にはリリア同様に決意が感じられる。

「その紋章は僕が死んでから発動する、2人を意識的に遠ざける、一定期間過ぎると消えるようになってる。その紋章が輝いたとき、2人が旅に出るときだ」

リリアが死ぬ・・・

その言葉に僕ら兄弟は、全然実感がなかった、今まで一緒に暮らし悠久の時を共に暮らしたのだ、ずっと一緒だと思ってた。

しかし、最後のリリアの目を見たとき、それは実感せざる負えなかった。

「そして私が最後に来る」

「君達・・・弟子への、試合だ全力で掛かってきてくれ」
その言葉でリリアは全身に感卦法をめぐらせる、
それは今まで感じたことのないような、まるで蠟燭が最後に燃え尽きる激しい炎のようだった。

次に目が覚めたとき、リリアは居なかった。

あの試合はどこらへんで終わったのだろうか・・・

キティの意識が飛ばされた後、僕は一人でリリアとやりあった。

凄まじい死闘の末、僕は負けたのだ。もちろん総合的な実力では僕はリリアと同等、それ以上の実力を保有していた、しかし、リリアは僕ら2人に勝って見せた。

その言葉に僕ら2人は唾を飲み込む。

死を覚悟している者の強さを改めて実感した。

僕らはまるで、亡き柄のように、数日を過ごした。
やはりリリアという存在は大きかった。

ある日、僕らはシリオス帝国の完全崩壊の知らせを聞いた、丁度そ

のころ手の甲の紋章が光り輝きだした。
僕ら2人は肩を抱き合って泣いた。

そして、僕らは全てを背負ってそれぞれの旅に出た。

時流れ（後書き）

このまま大戦期いつちゃっていいのかな？
意見を仰ぎたいです。

つつつても大戦は何マリ干渉しませんかね。

それと・・・原作が消失しましたw

原作編が書けない・・・

対ナギ（前書き）

今回から短くなります。

PCが大変な状況なので・・・

ご勘弁ください。

対ナギ

あの旅立ちから数百年という月日が経った、

未だに、リリアから貰った手の甲の紋章は消えることがない。

しかし、時折薄くなったりしていて消える気配は見え始めている。

時折キティの噂を耳にしながらも、会いにいけないもどかしさは感じていた。

今風の噂でキティは現実世界に居るという事を聞いた。

さらには賞金首でもなくなっている。

僕の方は・・・

今僕は現実世界の京都に居る、

此処でスクナが召還されたという話を聞いたからだ、

もちろん僕が会いにきたのはスクナではない、キティに登校地獄というふざけた魔法をかける予定の赤髪がどの程度なのか、それとこれから起こるであろうことを未然に防ぐために、赤髪・ナギに会いに来たのだ。

深い森の中、スクナを倒したであろう一撃で出来た湖の大きなクレイターを見つめた。

この森に入る時に、結界を感じられたがあの程度の結界じゃ僕をとめることは出来ないね。

この湖から感じられる微かな魔力の残留を意識下で追う。

やはり大戦の英雄、此処の近くに居るといことは大きな魔力が教えてくれる、

しかし、肝心の居場所が掴むことが出来ない。

「やっぱ、虱潰しに探すしかないのか・・・面倒くさいな」

そう一人言を残し、その場を去ろうとする、

待てよ・・・

手っ取り早く、ナギを探す方法があるじゃないか・・・
目の前に！

その深い森の中にエレオスの不適な笑いが木霊した。

俺の名前はナギ・スプリングフィールド、

今俺は現実世界の京都って所の着てるんだけど・・・

姫さんは

「現実世界での買い物に興味が・・・」

とか言って、アルを連れてどっかいつちまった、

そのせいで今すげえ暇なんだ、スクナを倒したことだしさつさと戻
っちまえばいいのに、

姫さんが此処に1週間程滞在したいとのたまったんでね。

詠春は、なんか「侵入者・・・？」とか言つてどっかいつちまった
し、

俺も付いていこうかと思つたけど、

「いえ、多分結果に反応しない程度の小物だと思いますので・・・」
そう、側近の男に言われて俺は待機してると。

なんかおもしれえこと起きねえかなあ・・・

「・・・解除」

深い森の中エレオスは湖に向かい手をかざして、呪文を呟いていた、
その手には指輪が嵌っており、小指の指輪が鈍い黒の輝きを放つて
いた。

その言葉を言い終えると、空気中に存在する魔力が形を持ち始める。
その一つ一つがエレオスのかざす手の方向に向かって集まっていく。

一つ一つが綺麗な青色に輝いており、集まるに連れて段々と光を増していく。

「――召還、融合」

その言葉に光は反応し一つの形を成していく。

その姿は・・・

紛れもなく、両面スクナそのものだった。

「ぎゃああああおおおおおおおおおお」

集まった個体、スクナは大きく雄叫びを上げる、

その叫びと共に、ガラスの碎けるような音がして、ここら周辺を覆う、結界が崩壊していく、

周りの木々はざわめき始め、

その咆哮で空気は揺れる。

スクナを見ると、口に魔力が集まり始め、前方の山に光球を放

とうとする、

やりたいように、暴れる、スクナを見てエレオスは深いため息をつき。

「少し、黙ってて」

そういつてパチリと指を鳴らすと、スクナの口の周りが凍り始める。

「――――！！！？？」

突然自分の口が凍るという不明瞭なことが起こり、さらには、行き場を失った魔力がスクナの口の中で暴発する、叫びにならない、声を上げる。

少し体がぐらついた後に。

スクナはそれを、行ったであろう自分の眼前に浮いている人間に狙いを定めた。

体からの魔力放出は凄まじいものだ。

そして、大きく腕を振りかぶり、拳をその人間に向かって振り下ろした。

しかし、その拳は後方から飛んできた、大きな雷の奔流によって防がれた。

その雷は、そのままエレオスに向かって直進が続けるがエレオスが手をかざし、中指の指輪が黒く光ると、その雷は空中に霧散した。

「てめえ！！せっかく倒したスクナを復活させて何をたくらんでやる！！」

赤毛の青年、ナギは詠春の屋敷内を散歩していると、不意に大きな魔力の流れを感じ取った、

その方向は、詠春が侵入者が・・・といって出て行った方向だ。

すぐさま空中に浮かび上がり、その方向を見てみる。

そこにいたのは、つい先日倒したはずのスクナであった。

瞬間、大きな咆哮が起こり、咄嗟に耳を塞ぐ。こないだ出てきた奴と同程度だ。

「おもしれえ！！」

そう呟き、一目散にスクナに向かって動き始めた。

対ナギ（後書き）

なんか、オリ設定オンパレード・・・

原作がないので、口調が分からない・・・
早く戻って来い！原作！

対ナギ2

「てめえ！！せっかく倒したスクナを復活させて何をたくらんでやる！！」

そういったのは行き成り僕に向かって雷を放った男は言った。

まさか、こんなに早く会うことが出来るなんて、

男の前に対峙し、無言で構える。

「うち！おもしれえ！！やってやるよ！！」

そういつてナギは僕に向かって虚空瞬動をしようと、足に気を溜めた。

「まっってください！ナギ！！」

その言葉と共に、ナギは急に宙でとどまる。

言葉を上げたのは、風のローブをまとった長髪の男、

ああそうかあいつがアルビレオ・イマか・・・

「アル！なんで止める！！あいつはスクナの封印を破りやがったんだぞ！」

ナギはスクナに向かって指を刺し、声を荒げる。

アルは、ナギの指したスクナをちらりと見やり、すぐにナギに言った。

今のスクナは、僕が凍り付けにしてあるから動く心配はない。

「まってください！スクナが召還された以上、詠春を待つのが得策です！完全消滅をさせるのは、ナギとはいえ、手間が掛かるはずです！それに・・・スクナの前に立っている人に見覚えが・・・」
アルは、空中に浮かびナギに近づき小さく声をだす。

僕には聞こえてるんだけどね・・・

「詠春つてもしかして、刀を持った奴か？神鳴流を使っやつ？」
僕は聞こえた内容を、元にしその言葉を返す。

アルは少し驚いた後、苦い顔をして了承する。

「ええそうです！それがどうかしましたか！！」

丁寧語でも、言葉に怒気を孕んでいる。

「ああ・・・そいつなら・・・」

さつき殺した」

その言葉に、ナギとアルの顔が驚愕に歪み、その後、全身に魔力が行き渡る、しかもこれはオーバードライブ気味だ。

「いや、僕が此処で、湖を視察していたら、急に後ろから斬りつけてくる人間がいたから・・・凍らして粉々にしちゃったよ」
エレオスは含み笑いをしながら、笑顔でそういった。

まるで人を殺すことを厭わない様な表情で。

静かな森が、ナギとアルの魔力で大きく揺れる。

「ナギ！冷静になってください！！詠春が簡単に死ぬはずがありません！」

その言葉にナギは自を取り戻す。

「まあ、信じる、信じないは君達の勝手だけだね」

さらに怒りを煽る、まあ怒ってくれないと意味がないしね。

あの始まりの魔法使いを倒した実力を見てみたいから・・・

「ああそうだ、スクナはもういいか、じゃあね」

そういつて、エレオスが指を鳴らすと、粉々になって砕け散った。

「詠春とかいうやつ、みたいだ」

砕け散る様を見てエレオスはそう言った。

「てめえ、いい加減にそのふざけた口閉じやがれ！！」

急にナギが叫んだと思ったら、大きな衝突音と共に、
ナギの拳が僕の障壁を砕いていた。

3枚だけだけど。

「っち！！硬え！！何枚重ねてやがる！！」

教えるつもりはないけど7枚かな。

「んじゃ俺からも！」

そういつて、エレオスは高速で、ナギに近寄る。

そして、振り上げた拳をまっすぐに突き出す、

「つく！！」

その拳を寸での所でかわす、

そういつたエレオスとナギのやり取りをアルは、興味深く見ていた。

・・・ナギとやり合えるだけの實力を持ち、膨大な魔力保持者、そして金髪。

指には5つの黒い指輪。

金髪・・・黒い・・・黒・・・

「つつ！！もしかして貴方は！！」

その言葉と共に、ナギはエレオスと距離を離す。

「ucci！あいつ相当できるぞ・・・！で、アル！あいつの正体かなんか分かったのか！？」

その言葉には、尚も怒りが感じられるが、どこか、強敵と出会えた喜びがにじみ出てる。

「貴方は・・・1000万\$の賞金首、吸血鬼の真祖、最狂の兄弟の兄エレオス・マクダウェルですね！！？」

対ナギ 終（前書き）

オンパレードです、でも反省はしていない

対ナギ 終

「貴方は・・・1000万\$の賞金首、吸血鬼の真祖、最狂の兄弟の兄エレオス・マクダウエルですね！！？」

その言葉に、先ほどまでの魔力の奔流が止む。

「へえ、知ってるんだ。名前は知ってても、僕の特徴とか知ってる奴はほとんど居ないと思うんだけどな・・・」

その言葉は真実だ、僕の姿は変幻自在だ、今しているのは元の姿だが、基本は大人の姿や老人の姿になっている。

なので、この姿を知っているのは、余程、情報制限がされていない情報を見ることが出来るレベルの人だけだ、僕の姿に関しては緘口令すら轢かれている。

元老院とかの爺と交渉した末だがな、

まあ、1000万\$ってのは、僕が止めさせたただけなんだけどね、実際なら・・・

ちなみに、キティは原作通り600万\$になっていた。

「てめえが、あの最狂の吸血鬼か・・・どおりで、こんな強え訳だ」
ナギは訝しげに此方を見た。

「まあ、それを知ったところでどうするの？逃げるの？」
あえて此処は挑発にかける。

「誰が逃げるか！詠春を返してもらうまでは、退けねえ！！」
その言葉と同時にナギの体に再び魔力が滾る。

「ナギ！貴方が負けるとは思いません」そろそろ集中したいんだ、消えてくれ」

アルの言葉が無詠唱の氷神の戦槌でさえぎる。その戦槌はアルの重力魔法によって弾かれる。

此方も、体に氷の魔力を取り入れる。

「僕はね・・・君の本気が見たいんだ、造物主を倒したその実力を！！」

顔には薄っすらとニヤケた笑いが含まれている。

「て、てめえ！どこでその情報を！！」

そう、戦った奴以外は、敵の親玉の名前は知られていない、それを知っているのは・・・完全なる世界の残党か、元老院以上の
お偉いさんのみだ・・・

しかし、問い詰めても目の前の男は答えないだろう。

「僕に勝ったら教えてあげるよ！ああそれとね、君の仲間も呼んで欲しいんだ、なんていったっけ、ジャック・ラカンだっけか？」
その言葉はいかにも、お前一人では勝てないから呼べよと言っているようだった。

「いらねえよ！！お前なんか一人で十分だ！」

そういつて、ナギは虚空蠢動で飛び出し、戦いの火蓋がおろされた。

ナギが、殴ればエレオスは障壁を増やし、

エレオスが殴れば、ナギは寸でのところで回避する、

そんな戦闘を1時間の以上続けていたが。

「はは！楽しいよ！此処まで僕と戦り合える相手は150年ぶりだよ！！」

その顔をもはや狂気の喜びにゆがんでいる。

頭の中には当初あった、キティに登校地獄をかける坊主のお仕置きという言葉はなくなっていた。

「でもな、僕が見たいのはそんな力じゃない！！」

その言葉と共に、エレオスの魔力の密度が爆発的に上がる、

その、奔流に、ナギは拳を止め吹き飛ばされてしまう。

そして、その距離を一瞬にして詰めたエレオスは、がら空きのナギの懷に、魔力を纏った拳をぶつける。

すると、まるでボールのように、ナギは大地にたたきつけられる。

「そうだ、あいつを殺せば、本気出してくれるか？」

そういつて、エレオスの目線が捕らえたのは、アルだった。

その言葉に、アルは身構える。

アルとの距離を詰めようとした、その一瞬、

「貴方の相手は私じゃありませんよ!」

「俺!! だろ!!」

その言葉と同時に、腹部にナギの雷を纏った拳が直撃する。

起き上がってきたナギは、先ほどのような、魔力ではなく、まるで爆発したような力を見せていた。

「おまけにこいつもくれてやる!! 来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え、
『雷の斧』」

そういつて、放たれた高速詠唱の雷の斧はエレオスを捕らえる。

そのダメージに、吹き飛ばされながらも、エレオスは笑った。

「そうだよ! これだよ! これ!」

まるで先ほどのダメージがないかのごとく、饒舌に歓喜の声を上げる。

空中にとどまり、体に魔力を行き渡らせる、

すると、エレオスの髪の色が、青色に変わった、まるで透き通るような青色だ、

「さあ僕にみろ」

その言葉をさえぎるかのように、ナギの拳がエレオスの頬を捉える。先ほどまで重ねられていた、障壁は、音もなく崩れていく。

「かはっ！！」

さらに、ナギの猛攻が続く、障壁がなくなった、エレオスはすでにサンドバック状態だった。

「くらっつけ！！」

最後に、大きく魔力のこもった拳がエレオスの腹に直撃する。それを追隨するかのように、雷の矢が1000本ほど、打ち込まれる。

凄い勢いで地面にたたきつけられる。体が痺れる、

「つつっ！！！」

何百年振りかの痛みに、声にならない叫びを上げる。

これが・・・これが、造物主を倒した、英雄の実力・・・

おもしろい！おもしろい！！！！！！

エレオスは地面からふらりと立ち上がり、高らかに笑いを上げる。

「ははっ！はははっ！！はははははは」

その体からは、一切の魔力が感じられない。

「気味わりいなあ、とどめだ！！契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆」

ナギは止めをさすべく、ナギの最大呪文を唱える、

そこにこめられる、魔力は、スクナが何体居ても止められないであろう程の大きさの魔力だ。

しかし、当のエレオスは回避行動はおるか、障壁を張る様子すらない

その様子を怪しんだ、アルは言った。

「ナギ、気をつけてください！なにか企んでいるかも知れません！」
忠告の意味で、ナギに言うが、

ナギは聞く耳を持たない、

「大丈夫だって！何してきたったてこいつは止められねえ！！百重千重と重なりて、走れよ稲妻『千の雷』」

そして、幾千のもの雷がエレオスに向かって放たれた。

その瞬間にエレオスの体に爆発的に魔力が宿る。人差し指と親指の指輪の二つが黒光りを始める。

今までにない大発光だ。

「ははははっ！！！！術式固定！！！！現象保存！！！！」

その言葉と共に、ナギの千の雷がエレオスにあたる寸前で、まるで時間軸から切り取られたかのように停止する。

「つつな!!!」

その現象に驚いたのは、アル、ナギ両方だ。

しかし、エレオスの不思議な行動はそれだけではとまらなかった。

「ははは!!! 契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが!!!! 現象保存!!!」

凄まじい高速で詠唱し、その出した魔法、いや、魔力塊を千の雷のように固定したのだ。

「ナギ!!! 嫌な予感がします!!! 止めます!!!」

そういつて、ナギの許可を待たずに、アルはエレオスに向かい自分最大の重力魔法を放つ。

しかし、あたっている筈の重力魔法をもともせずエレオスは続ける、

次は、小指にはめられた指輪が黒く光りだす

「術式結合!!!! 掌握。魔力充填『術式兵装』!!!!!!」

その一瞬で、周りの音が一切なくなる、エレオスの体からは神々しい光があふれ出ている。

あまりの激しい魔力の奔流にナギと、アルは近づくことすら許され

ない。

「っちい！！何が起こつてやがる！！！」

「装創造！！装填『魔塊装』！！！」

その言葉と共に、右手には金色のグローブ、左手には青色のグローブが嵌められる。

来ている、アーティファクトと思われる装備に金のラインが入る。青の髪とあいまって、その姿は、まるで・・・

最後に、大きな魔力の奔流が起こった。

その姿は正に神々しかった。

「氷神雷神」

「ナギ・スプリングフィールド、決着だ」

エレオスは静かにそう言った。

「おもしれえ！！やってやるよ！！契約に従い、我に従え、高殿の

王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて」
ナギは、もう一度千の雷の詠唱を始める。

その前にアルが立ち、詠唱を最後までさせようと、守りに入る。

しかし、エレオスはそんなナギとアルを見たまま一步も動かない。

「舐めんなよ！！走れよ稲妻『千の雷』！！！」

そして、放たれた千の雷、その威力は先ほどの雷と比べても見劣りしない。

しかし、その放たれた一撃は、金のグローブを嵌めた右手を前にさすだけで、先ほどの空中で止まった、

「つつな！！またかよ！！」

そのことに驚愕を覚えざる得ない。

そして、エレオスは止めた千の雷を両手で押しやる。

すると、雷は雹をまとして、ナギの方向に逆戻りし始めた。

その一撃を辛うじて避ける。

「君のおかげで、また力が手に入ったんだ、感謝するよ」

エレオスはそういつて、両手を天に向けた。

その手からは、先ほどの千の雷の何倍もの魔力が感知できた。

その行動を見て、アルは、

勝てない・・・今のナギでも勝てない・・・
赤き翼が束にならなくては、倒せない相手だ・・・

そう、思ってからアルの行動は早かった。

それでも果敢に掛かっていこうとするナギに言う、

「ナギ!! すみません!!」

そういつて、ナギの体を掴み、この場から転移した。

「逃げた・・・か、懸命な判断だね。また強くなって、僕のところ
に来てくれるといいな」

あ、そうだ・・・こいつも送ってやるか。

薬指の指輪が光って、目の前に凍りつけの詠春が現れる。

パチリと指を鳴らすと、氷が融解され、地面に詠春が落ちる、
ほっておいても、誰か助けに来るだろう。

最後に
これは、楽しませてくれたサービスだ。

さらに指輪が光って、周りが僕が来る前の状態に戻されていく。
最後に結界を張りなおし、エレオスは影に沈んでいった。

対ナギ 終（後書き）

感想もらえないから、作品がどうなってるのか自分じゃ分かりません。

誰か、どこでもいいからつつこんでください。

原作（前書き）

短いよ

原作

あれから、何年かの月日が経った、原作通りキティが麻帆良学園に登校地獄に掛かったという噂を聞いた。

これに関しては、僕はあえて何もなかった。

実際にナギを殺して、やめさせるという考えもあったが、原作でのキティは後半生き生きしていたと思う、実際に3Aの皆に囲まれて楽しそうに暮らしていた。

実際ナギを何回か半殺しにしたのは内緒だ。

そう、だから我慢してたんだ、僕の魔力を持てれば、この紋章を破壊することも出来る。

しかし、リリアとの約束を守っていたんだ。

でも、ついに今日手の甲の紋章が綺麗さっぱり消えてなくなったんだ。

ちょうど、この時期に消えるなんて・・・

もしか、リリアは・・・

いや、今そんなこと言ってもしょうがない。

キティの幸せのためにも、傍観を決め込んだ僕、でも我慢できなくて一回だけ会いに行くことにしたんだ、一回だけ。

次の満月の夜に。

此処は麻帆良学園の前、実際深夜のため人の気配はない。

僕の眼前には丁度結界がある、多分これがキティや侵入者を縛る結界なのだろう、電力の力も薄っすらと感じられる。

僕はその結果に沿うように、結界を張り巡らす。

これは、僕が中に居る間外からの魔物の進入を防ぐためだ、既存の結界の3倍の威力は発揮するだろう。

結界が張り巡らされたのを確認して、

僕は元の結界を粉々にした。

結界を粉々にすると、西方3kmの地点でキティの魔力と思しきものがあがる、

数百年ぶりだ・・・キティの魔力を感じることが出来るなんて・・・
！

私の名前はエヴァンジェリン、

布団に横たわり数百年前のことを思い出していた。

そう、思い出しているのは実の兄のこと、エレオスという兄は私の一番の理解者であった。

リリアに掛けられた手の甲についた魔法により離れ離れになっていたが、つい先日手の甲の魔力が切れたのだ。どんな高名な治癒魔法使いに消させても消えることがなかったのだが・・・

この学園に入ることになったのは、憎きナギ・スプリングフィールドのせいだ。

私が、魔力切れで崖から落ちたときに、その身を助けられた。

そいつは、私の名前を聞くや否や私をおいてどこかにいってしまった。

私はなぜそいつが消えるのか、気になりそいつ追いかけた、高い実力を保有しながらも私を倒そうとせず、逃げ続けるこいつに興味をもったんだ。

それで、とうとう追い詰めた南の島で、私はナギとの勝負に負けた拳句、登校地獄とかいうふざけた魔法を掛けられてしまった。

「3年経ったら、魔法を解いてやる」

それだけ言い残して、奴は私をこの麻帆良学園において、どこかに去っていった。

奴は3年待っても来ることはなかった、まあもとより来ないだろうとは思っていたが。

それでも、この魔法を解くことは出来ず日々をすごしていた。兄が来るかも知れないという、一縷の望みを持ちながら。

物思いに浸りながら、私を夜中なのに眠れずに居た。

こんな満月の夜に吸血鬼である私に寝ろという方が無謀である。

スーと部屋の戸が開く音がした。

そちらの方を見やると入ってきたのは、私の従者である、絡繰 茶々丸と、その姉、チャチャゼロだ。

「マスター眠れないのでしょうか？」

「ああ、少し昔のことをおもいだしな」

その言葉に突っ込んできたのはチャチャゼロだ、

「御主人、エレオスノ兄貴ノコト力？」

その顔は、ニヤケた様な表情だ。

その言葉にあわてて反応しようとしたとき、口を挟んだのは茶々丸だ。

「エレオス・・・という人物について、私はマスターから存じ上げておりません、姐さん教えていただけませんか？」
首を傾げ、チャチャゼロに視線を向ける、

最近こいつは急に人間みたいになっ たな・・・
これもぼうやのおかげか？

そう考え、口を開こうとしたときだった。

結界の崩壊が、私の頭の中に情報をして流れ込んできた。

つつな！！

「結界の崩壊を確認、マスターの内包魔力の増大を確認できます」
冷静に伝えるのは、茶々丸だ。

その言葉を聞いて、私は一瞬固まってしまう。

隣では、チャチャゼロが「動ケル！ウゴケルゾ！！」と喜びをあらわしていた。

最悪のシナリオを考えてしまう、此処まで結界を見事に粉々にする相手だ。

実力的にも考えて、A A以上の実力は保有しているだろう。
多分、今はその侵入者のもとにタカミチが向かっていることだろう。

私を外に出るために、服を着替え、魔法媒体の指輪をはめ、糸を持った。

「茶々丸は此処でまっっている、チャチャゼロはついて来い！」
つい、声が大きくなってしまっ、それほどの緊急事態なのだ。

しかし、実力が戻った今、私よりを強いということはありえないだろう。

久々に楽しくなりそうだ……

エヴァはニヤリと口元をゆがめ、急いでその場に向かった。

今の僕の格好は、全身真っ黒だ、黒のローブで頭まで覆い、顔は見えない状態だ。

どうやって、キティと会おうか？と考えていたら、目の前に男が現れた。

「君は誰かな？何しに此処にやってきたのかな？」

年は30ぐらいであろう、中年の眼鏡男、しかし、その中に内包する、気力は中々のものだ。

答えずに、沈黙が続く。

「答えないなら、答えさせるまでさ！」
その言葉に、見えない拳が5つとんでくる、

見えないといっても、空気の歪みなどから、簡単に分かることだ、

そして・・・避ける価値もない。

その5つの拳は僕ね結界に辺り、消えてなくなる。

「つつ!!」

その男は、それを見るや否や、僕から距離をとる、そして、片手に魔力、片手に気ををあわせる。

ふむ・・・感卦法か、珍しい。

豪殺居合い拳!!

ズドンという、効果音と共に、見えない大きな拳が僕の真上から降り注ぐ。

砂煙を巻き上げながらも、地面を削る、その見えた目からも、威力は安易に想像できるだろう。

「つつな！！無傷」

そんな煙の中から、一步も動かず無傷で出てきた僕に、男は驚愕の声を漏らす。

その後も何度かその攻撃が続けられる。

しかし、いくらやろうと目の前の男が僕にダメージを与えることはない。

いい加減に、うざくなってきた。

その様子に焦りつつも、男は僕に問おうとする、

「君は一体なにm「凍れ」」

しかし、その言葉は僕の一言によってさえぎる、

手を掲げる、その行動だけで、男は一瞬にして凍りつく。

「感卦法なんて、懐かしいものを見せてくれたお礼だ、殺さずにおくよ」

さあて、キティの魔力が此方に向かつて、走り出したようだ。
楽しみだなあ。

原作（後書き）

俺「おい、原作かえせよ!!」

友「じ、じつは・・・ってことでして。

すみません!!!!」ドゲザ

この、友は俺のネギまを地方の家においてきたと、しかも、極地なので、次に取りに行くのは3ヵ月後とか、

あれ、原作編入ったのに、原作なしとか・・・死んだw

なので、口調とか間違っていたらおしえてくだしw

一つ、聞いていいかな？

学園長サイドとか需要ないよね？

ネギサイドとか いらないよね？

再会（前書き）

ゴメンナサイ、

ちょっと時間なくて、此処までしかかけなかった、

二つに分けます、、o r z

再会

私がある場に到着したとき、目にしたのは氷付けにされたタカミチの上に座っている、

全身黒尽くめの男？だった。

「お前が、エヴァンジェリンか？」

着くなりそうやって尋ねてきたのは男だ。

「そうだ、私がエヴァンジェリンだ、なんだ？この学園には私に用があったのか？残念なことに、今の私は力を取り戻しているぞ？」
声から相手は男だと思われる、といっても変声期前の若い声だ、身長もそこまで大きいとは思えない、こいつ・・・子供か？

だとしたら・・・この年でタカミチを？

だとしたら、調子に乗らないように、上には上が居ると教えてやるか。

僕が、凍らしたタカミチの上に座って、キティを待っていると、相当な速度で、キティは現れた。

感激だ、感激のあまり、すぐにも抱きついてしまいかもしれない。その衝動を抑えつつ、冷静にキティの問う。

僕が此処にきた目的はキティに会うことだが、ただ会うだけでは面白くない。

此方は姿を隠し、力の戻ったキティと数百年ぶりの本気の手合いを試してみたいと思ったわけだ。

姿をばらしてしまつては、再開の余韻で本気を出すことが出来なくなるからね。

「君と・・・戦いに来た。真祖の吸血鬼」

声で気づかれることはないだろう、変声はしていないが、数百年ぶりだ。

「ほう、真祖の吸血鬼と知った上での私と戦うというのか、いいだろう、後悔・・・するなよ？」

その言葉と同時に、キティは、糸を構える。

「御主人俺ガヤツティイカ？」

今まで黙っていたチャチャゼロが口を開く。

「チャチャゼロか・・・相手はタカミチを倒した相手だ、実力の程を確かめて来い！」

主人からの許可が下りた、殺人人形はエレオスに向かい、一気に駆ける。

縦に大きく一閃。

その一撃はエレオスには当たらない。

今の僕に障壁は展開されていない。
基本はオートで発揮されているのだが、せつかくの再開だ、障壁は切っておいた。

しかし、障壁があるからといって、体術が出来ないわけではない、むしろ体術の面でも、エキスパートだ、いくら、研鑽を積んだ、真祖の従者といえど、一撃与えるのは至難の業だ。

「ツツ！！ナンデアタラネエンダ！！」

横に一闪、縦に一闪、斜めに一闪

全ての攻撃が寸での所でかわされる。

エレオスは小さな声でささやく。

「・・・ゴメンネ、チャチャゼロ」

その言葉は、キティには絶対に聞こえることない声量だ。

その言葉に、チャチャゼロは何か気づいたような顔をして、声を上げる。

「オマエハ！？エッグ！！」

その言葉を言い終えることは出来ずに、エレオスの一撃を背に受けて、地面に伏せてしまう。

「チャチャゼロ！！」

キティはその光景に声を発する。

しかし、

「十分だ、えいえんのひょうが!!」

すでに、チャチャゼロとの交戦中に呪文と魔力装填は終わっていたらしい。

さすがキティあざといな、

その言葉とともに発せられる、ダイヤモンドダストの一撃、

いいね、いいね!!この一撃は相当な煉度だ。

エレオスは、手を前に掲げる。

その腕には、青のグローブが装備されていた。

その行動だけで、キティの放つえいえんのひょうがは時を止める。

「っな!!」

驚きながらも、キティは此方に攻撃の手を休めない。

20本ほどの不可視の糸が僕を襲つ、呪文を唱えさせないためだろ
う。

やはり、強い・・・しかし、あのときのナギのような強さは感じない、

この程度か、

そう思い、此方も攻撃に転じる。

先ほどから、固定されているえいえんのひょうがを霧散させる、大気に充滿する冷気は十分だ。

キティが存在しているところに向かって、手を掲げる、それでその座標は瞬間的に凍りつく、キティも危機的に感じたのか、寸での所で回避する、しかし、右肩が凍り付いている、

キティは、全身を蝙蝠に変化させ、再び終結する、現れた姿は、凍ってはいない。

キティの顔から焦りが感じられる。

僕は再び連続で手を掲げる、

それを紙一重にかわしながらも、無詠唱の氷爆で反撃してくる、それが、空気中の冷気を発し、さらに此方の氷の勢いは強まる。

キリがない！！あいつは強い、無詠唱のこの氷呪文、相当な煉度だ。此方も本気で掛からねばなるまい。

そう思った矢先、キティは影の中に消えていった。

どこにいった・・・？

周りを見渡すが、キティの魔力が充満していて、どこに現れるか健闘も着かない。

うまいな・・・わざと、魔力を充満させて、場所を分からなくするか。

突然、背中に衝撃が走る。

僕の後ろに出来る影から、キティが姿を現す、その姿は闇を纏い、闇を裂く剣を持ち。

マギア・エレベアとエクスキュショナーソードか、その魔法の煉度は、僕と別れた時とは比べ物にならない。影に隠れ、呪文を唱える。

二重に呪文を唱えていたのか、相当高度な技術だ。

もちろん、背にダメージはない。

「私に、此処まで出させることが出来たんだ、光栄に思え!!」

再会（後書き）

そつえば、キティにエレオスをなんて呼ばせようか？

おにいちゃんじゃ流石におかしいよね？

兄貴・・・なんか違うなw

書き溜めってか、二話分の話が消えた、やる気なくなった。
やる気次第はじめます。たちなおれない。

再会 2（前書き）

やる気、2割もどつたぜい！！

更新頑張るよ！

ちなみに、消えてしまった投稿とは、まったく違う展開になってしまったw
いいいよねw

再会 2

「私に、此処まで出させることが出来たんだ、光栄に思え!!」

その言葉と同時にキティが切りかかってくる、そのスピードは先ほどの非にはならない、

さらには、僕の障壁が次々と破壊されていく、

おもしろい、

そう思い、僕は障壁の展開をやめる、此処からは純粹に体術でキティの技を避ける。

スピード・パワーにおいてはキティがわずかに上回っている、闇の魔法なしの僕ではこの程度だ、

実際はすでに意識しなくても闇の魔法状態になることはあるのだが・

しかし、テクニクは此方が上回っている、

技術で、すべての不足分を補っている、

「ツツチ!! 当たらない!!」

全ての攻撃を見切っている、僕にはキティの攻撃は通用しない。

そのことに焦りを感じている、キティは声を荒げる、

これ以上は無駄だと判断したキティは一度距離をとる、

「貴様・・・一体何者だ?」

周りの空気が、一瞬にして音をなくす、

「君が僕を倒せることが出来たら、教えてあげるよ」
こんな簡単な挑発でも、キティなら乗るだろう、

自分の力に絶対の自信があるキティならば。

段々と、キティの周りを濃厚な魔力が漂い始める。

「そうか、なら知らなくてもいいな、お前は此処で死ぬから!!」
一瞬、その一瞬でキティは僕との間を詰める。

その距離はすでに、キティの死の領域。

先ほどのスピードとは比べものにならないスピードだ。

一閃

その一閃は、エレオスの体を貫く、
かのように、見えた、

しかし、振るわれたキティのエクスキュナーソードはエレオスに当た
る直前で霧散していた。

「貴様！何をした!!」

驚愕もつかの間、硬直するキティの額にゆつくりとエレオスの手が伸びる。

「ッー!!」

その手を避けるために、後ろに飛ばうとするが、地面が凍り付き、キティの足を捕らえている。

その事実気づき、キティはそれでも逃れようと、無詠唱の魔法を乱射する。

しかし、どの魔法もエレオスには届かない。
全てが時の止まったように、動かなくなってしまう。

そして、

「はい・・・お疲れ」

額に指輪の黒光りするエレオスの手が添えられる。

「その指輪!! お前はエ」

言葉さえぎり、キティの体から魔力が抜けてしまう。

闇の魔法を霧散させると、ともに体内魔力も霧散させた。
今のキティはただの女の子に過ぎない。

キティは気絶してしまった。
それをやさしく抱きとめる。そして強く抱きしめる。

「マスターを放してください」
唐突に後ろから声をかけられる。

まさか、此処まで近寄られるなんてね、生体反応はなかったんだが。
そう思いつつも後ろを振り返る。

そこには、端麗な人形がいた。

そうか、こいつが茶々丸か、

敵が圧倒的強者でも、主人のために立ち向かう。
いいね、人形ならではの。人間だともいえない。

「悪いな、久しぶりの再会で感極まってしまった」
そういつて、気絶したキティをお姫様抱っこで持ち上げる。

そして、茶々丸に歩み寄る、無論警戒はされたままだ、

丁重にキティを茶々丸に受け渡す。
茶々丸はこういった行動の意味が分からず、顔に？マークを浮かべる。

「キティにこういつておいてくれ、また会いにくると」
そういつて、茶々丸に背を向け、歩き出した。

「まってください、貴方の名はエレオス・・・ですか？」

「さあね、キティに聞きなよ」

そういつて、エレオスは闇にまぎれて消えていった。

キティにも会えたし、良かった。

一緒にいたいという、感情をこらえるのが精一杯だったよ。
このまま、原作のように楽しくやってくれればいいのだが・・・

陰ながら、見守るとしようか。

目標は達せられた。

次は何をしようか？

同じ転生者を探すか？こちらは非常に魅力的だ、なんせ転生者の中には非常にレアな能力の持ち主が居るからだ。150年前も苦戦を強いられた。

この学園に侵入するか？

それとも・・・

まだまだすることは一杯あるな、一つ一つ片付けていくか。

目が覚めた時、一番最初に移ったのは心配げな顔をする茶々丸の顔だった。

此処は自分の布団の中。

そうか・・・私は負けたのか、

しかし、あの指輪・・・あれは・・・私との仮契約で出た、おにいちゃんの指輪。

会いに来てくれたのか・・・おにいちゃん

しかし、何故私に何も言わずに去ったのだろうか？おにいちゃんのことだ、それも意味のある行動なんだろう、戦闘の方は・・・用意に想像がつく、多分私がどれほど強くなったか知リたかったのだろう。

せめて、一言でもあの頃のようにキティと読んで欲しかったが・・・

考えに浸っている、キティに茶々丸は声をかける。

「マスター、体の方は大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だ、それと奴は私に何をしたんだ？」

「分かりません、私がマスターの場所に着いたときはすでにその人によってマスターは抱きしめられていました」

その言葉に、キティは思考を止め、顔を赤らめる。

しかし、すぐに表情を戻しキティは問う。

「しかし、何故お前は来たんだ。待機しろといったではないか、相手は私より格上だったんだ、お前も壊されてもおかしくはなかったんだぞ」

私より格上・・・？

マスターがそれを認めるなんて、

そう、思いながらも茶々丸は深々と謝罪した。

「すみません、いつまで経っても帰ってこないマスターを心配して」

その言葉をさえぎるように、キティは

「私に心配など無用だ、お前が死ぬ方が私にとってはつらいのだ」
そういつて、恥ずかしげに後ろを向いて布団にもぐってしまった。

その様子を、記憶のフォルダに収めながら、

「マスター、あの人は最後に、また会いにくる。とだけ言い残し去っていききました」

「あの方は、マスターのお兄様・・・なのですか？」

一番聞きたかった疑問をぶつける。

少しの間が空いた後キティはゆっくり答えた。

「ああ・・・確証は持てんが、おそらくエレオスの奴だろう」

その答えを聞いて、情報を整理してみると、
何故戦っていたのか？とか
仲が悪いのか？とかおもったが。

「フフ・・・そうか、そうか・・・また会いにくるのか・・・」

一人ぶつぶつとつぶやくマスターを見て、
あまり触れないことを心に決めてその場を後にした。

再会 2（後書き）

今回は、地味に難産だった・・・

次の回はどうしようか、

- 1、150年前の転生者との戦い。 構想はまだないwぶっちゃけ
- 2、この後転生者（ナギ以上）との戦い。
- 3、学園に残っちゃう
- 4、圧倒的实力で魔法世界突入、かき乱す 原作持っていないから
推奨はしない、いつかはやる、

どしどし、感想まっていますー^^

探索（前書き）

ぐだぐだ！！

もうやだ、文才ないw

オリ設定パレードb

探索

キティと分かれてから、僕はこの町の中央の世界樹の頂上で考え事をしていた、

これからのことについて・・・

この学園都市からもちたる所から、強い魔力が感じられる。

中には、魔族以上の魔力を持つ奴も居る。

いや、実際は魔族なのかもしれないが・・・

ふと、ナギと戦った時のことを思い出す、

あいつと戦ったことにより、僕はこの世でもトップクラスであろう雷の魔力の保存に成功した。

全ての属性の闇の魔法をすることは僕にとって容易なことだ、

しかし、氷・闇以外の適正を僕は持っていない。

使うことなら、他の属性も少なくともA A +のそれは出来るが、僕が欲しているのは、その属性を極めた者の最大最強の一撃、これの保存を目的としている。

まあ、僕は不老不死だから時間はまだたくさんある、より高みに、

手に雷を覆わせながら、思いにふけていた、

しかし、その思考は急にさえぎられる。

「誰だ」

短く言い放つ、先ほどから此方からは見えぬように隠れて此方を伺っている奴が居る。

「ふおおおお、ばれておったか」

そういつて、木の陰から現れたのは老齡の男。

「おぬし・・・此処に何の用じゃ？」

爺は僕に問いかける。

「人に会いにきた、それだけだ」

「ほほお、それはエヴァンジェリンの事かのお？」

爺は顔をニヤリとさせる。

「貴様が知る必要はない、失せろ」

その言葉とともに、手を掲げる。

その行動は、爺が居た場所を一瞬にして凍らせる。

「ふおおおお、物騒なあいさつじゃのお」

爺は先ほどの攻撃をなんなく避ける。

「わしはのお、一応此処の責任者をやつとるんじゃ、その管理下で
結果を壊した拳句、大規模戦闘をされてはかなわのお」

言葉が急に力を持ち始める、周りの大氣が一言一言で振動が伝わる。

「一番上に立つものとして、此処は責任をとらねばなるまい？」
爺からあふれんばかりの魔力が湧き出る、

「それが、あの最凶の吸血鬼だとしてものお!!」

その言葉と同時に爺は、衰えなど感じさせない動きでエレオスに近づく。

その拳には、様々な魔力が交じり合ったような七色の魔力が纏われている。

風を切る音より早く、最大の一撃を見舞う。

「貴様じゃ、僕は満たせない」
エレオスは静かにそう告げる。

その一声で、爺はその長い頭を掴まれる。
「ふぉ!!」

拳の魔力は霧散し、体から魔力が吸い取られる感じが爺を襲う、

体を振って抵抗を試みる。

エレオスはその抵抗に逆らう様子もなく、すぐに爺から手を離す。

「どういう、つもりかの!？」

その言葉には怒気を孕む、

「爺、お前も分かっているだろう？ 圧倒的な実力の差を、何故齒向かう？」

まるで、その実力差をあらわすがごとく、体から魔力があふれ出す。近づくのですら、不可能な高密度の魔力が。

「わしは、学園長じゃ全ての責任はわしにある、おぬしを此処に入れてしまった責任がな。此処に住む生徒を傷つけさせる訳にはいかんのじゃよ、この命を賭してでも!！」

その言葉とともに、先ほどの3倍はあろうかという、魔力があふれ出す。

その、魔力の出方を見て、エレオスは苦い顔をする。

まるで蠟燭が最後の火を燃やすような魔力の出し方は、昔ことを思い出してしまう。

リリア……

こんなもの、もう見たくない!!

そう思った瞬間、エレオスから生えた20mはあろう、大きな氷で出来た腕が爺を掴む。

「なんじゃ！！これは！！」

爺はあふれ出る魔力を体にこめ、抜け出そうとするが、どうやっても抜け出すことが出来ない。

「爺、いいだろう、お前のその心意気に免じて、僕は、此处に居る間誰も傷つけないと誓おう」

僕のその言葉に、爺は呆然とした表情になる。

「ふお！！しかし・・・おぬしがそれを守るといった「黙れ」」
爺の声を遮り、力のある声で制する。

「爺、交換条件だ、もちろんお前に拒否権はないがな」
その顔は、まるで悪魔のように笑顔だ。

「俺の存在を黙認しろ、ああ、もちろん誰も傷つけることはしない、俺は、此处でやりたいようにやる。断れば、今この学園に貼ってある、結界を氷結結界に切り替える。一気に氷の都市の出来上がりだ」

爺の顔が絶望に染まる、残された選択肢は一つしかない、最凶の吸血鬼の黙認、これはこの学園にいつ爆発するか分からない核爆弾があるようなものだ。

その選択肢を選ばなければその爆弾は今此处で爆発されるのだ。

「安心しろ爺、僕は契約は破らん、攻撃してくる相手には容赦しないがな」

すでに自分の手は詰んでいると気づくのに少しの時間を要した。
完全に屈服。

「それと、他の奴には僕の存在を知らせるな、僕と話がしたいときは深夜0時にこの木の頂上までやってこい、それだけだ」

それだけ言い残すと、エレオスは満月を背にして、夜の闇にまぎれていった。

エレオスが消え去ると、学園長を握っていた氷の腕が宙に霧散した。
地面に膝を付き、考える。

これからのこと、最凶の吸血鬼を抱え込んでしまったこの状況。

何年か前にあの吸血鬼にナギが敗れたという、話すらあるのだ。
今の学園戦力では倒すことはおろか、傷一つつけることは出来ないだろう。

この学園で最強、いや、実際は違うのだろうがその現最強のわしですら、あやつ力の片鱗すら見ることが出来なかった。

「どうしたものかのお」

これから、することはあやつとの対遇を決めることかのお。

しかし、思ったより酷い状況ではないのかも知れない。

あやつと何回も交戦している赤き翼が生かされているこの現状、凍らされたが死んでいない、高畑君。

もし、ただの殺人鬼だったら、すでにこの二つの例はないだろう。そうでなかったと考えるだけマシかのお・・・

エレオスは再び、凍らせたタカミチの場所、もとい、結界を張った場所に戻ってきていた。

理由は、学園長とキティとその従者達以外から記憶を消去するためだ。

結界に魔力を注ぎ込む、注ぎ込まれた以下の魔力量の奴は僕との記憶がなくなる。

今日であった奴は僕以上の魔力を持った奴は居なかったから、この作業は簡単だろう。

そんなことより、これからすることは一杯だ。

何より、どうキティと接触を図るかが問題だ。

此处に居る、強力な魔力反応の相手とも戦ってみたいしな・・・

それぞれの考えを他所に夜は更けていく。

探索（後書き）

原作手元がないから、口調おかしかったらおしえてください。

これからどうしようか・・・？

プロットがないこの作品は常に暴走しまくりです。

一応頭の中で構想が出来てるのが、

1・副担任　これは、テンプレ過ぎて嫌い何だけどね一番書きやすいっちゃ書きやすいw

2・ぶらぶら　これは構想あまなくても、その場で書き進められるねw

3・原作進めちゃう！　これが今最有力候補かな。

4・エヴァと合流　構想もなんもないw書きづらいつたらありやしないw

5・学園長物語　学園長が奮闘します！！w

基本主人公は影から見守る役みたいな感じで進めたいです。

ちなみに、この選択肢だけど、選んだからって反映されるとは限りません、

一応、聞いてみるだけです、それでも多少の反映はありますから、

ご協力願うですw

もし、感想書いてくれるなら、一緒に好きなキャラクターも書いてくれると嬉しいな^^

闇（前書き）

お久しぶりです、
間を空けてすみません＞＜

闇

小さい頃から、負けたことはなかった、

今まで一度として負けたことはない、この麻帆良学園に入ってから
もそれは変わらない、

学園側からの干渉を避けるために、実力をひた隠ししている。

実際に学園側には普通の高校生として通っているだろう。

学園から実力を隠し続ける…これは、相当な実力がないと無理だろう。
う。

しかし、その実力が自分にはある。

この世界に転生…元の自分のことは既に忘れた、

自分が生まれたときからの不思議な能力を持っていた。

まさかネギま！の世界に転生したと思わず、普通の生活を送っていた。
た。

しかし、その不思議な能力は、自分がSFのような世界に転生した
ことを示していた。

能力に気が付いてからというもの、ひたすらその能力を磨いた。

磨くといっても、もとより完璧に等しいこの能力。能力を使った戦
い方を覚えたといったほうが良いかもしれない。

そして、知った魔帆良の存在、自分の中で少しの疑惑が確信に変わ
った瞬間だった。

それからは、能力を駆使して、魔法を知った。
気も覚えた、能力があるうちはどんなことをしても負ける気はない
が、

攻撃手段も覚えないと勝つことは出来ないだろう、

自分の魔力が世界でも最高峰とゆうことを知ったのは10歳の時だ。
既に麻帆良で暮らしており、大人しく小学生をやっていた。

そして見つけた、魔力と気、能力を駆使した戦い方を、
この戦い方をもってすれば、原作でも相当な実力を持つ、エヴァン
ジェリンすらも倒すことも出来る、そう思っていた。
実際に戦ったことはないのに、結果はわからないが、十中八九自分
が勝つだろう。

高校生になり、戦い方は完璧に近づいていた。
時より、学園に隠れ実戦経験をつんでいた。

今の俺は誰にも負けはしない。
しかし、実力を積んだからといって、何をするわけではないのだ。
その考えも、ついこないだ変わった、家族の死、それが自分を変え
た。

俺の家族は魔法を知っていた、そして、それを駆使し戦闘もこなし
ていた。

それなりに強いらしく、炎と水の魔法夫婦は結構有名だったらしい。

しかし、殺された見るも無残に殺されたらしい。
自分がいれば両親を守ることが出来た。自分が実力を隠してさえい

なければ…

両親を殺したのは、魔族だったという。

それからというものは俺は魔族を目の敵にした。

麻帆良からたまに進入してくる魔族たち、それを密かに処理した。学園側にはばれない、塵も残さず、消滅させるから。

学園にはびこる魔族を全部消すこと、それが今の俺の存在意義だ。

今のところ誰が魔族だということはわからない、魔族とわかり次第そいつは殺す、人間に媚いっていようと殺す。どうせ害をなすからだ。

しかし、人間の血を引いている奴は殺せなかった。自分の中でも人間を殺すのは嫌悪を抱いているからだろうか。

魔族側からすればはた迷惑な話だが

両親が死んでからというもの、学園の魔族を殺しつくした。

これが魔族に対する、八つ当たりだということとはわかっている。

しかし、それでもしないと自我を保てないのだ。

そして、俺は次のターゲットを定めた。

次のターゲット…それは、学園最大の悪、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、憎き魔族、真祖の吸血鬼だ。

最近どこからともなく、ふと視線を感じることがある。

背中に悪寒が走るような視線だ、こないだのおにいちやんが結界を崩壊させたことにより、私の魔力が完全に戻ってきている、その完全な私をもつてしても、その視線の出所を探ることは出来ないので、何度か、探知の魔法を放っているが、すべてが異常なしと告げている。

あれからというものの、おにいちやんは私の前に姿を現さない、爺にそのことを尋ねると、爺の不審な態度と、おにいちやんの名前を出したときの焦り様から、確かにこの学園におにいちやんがいることは分かった、しかし、それ以上の情報を爺は渡さない、

一体どこににいるというのだろうか…

無論この嫌な視線はおにいちやんのものではない、それは絶対だ。

そう思いに耽っていると、声がかかった、

「マスターどうかありませんか？」

従者の 茶々丸が綺麗な瞳でこちらを見て、疑問をぶつける。

「もしかして、マスターのお兄様のことでしょうか？」

「いや、違うが…気にするな、少し思いに耽っていただけだ」

そう告げて、少し歩みを速める。

茶々丸は不思議な顔をしながらも、それ以上は問い詰めてこなかった。

その日の夜、ぼうやの特訓を終えた後、夜道を一人歩いていた、

茶々丸は家で留守番だ、少し散歩するといつて、家を出たのだ、今宵は満月。

嫌な視線を感じるのもそろそろ、嫌気がさし、こちらから仕掛けることにしたのだ、無論相手をなめるつもりはない、こちらの探知の魔法にも引つかからず自分にも場所を悟られない、相手だ相当な使い手だろう。そして満月のこの日完全武装をして満を持して決戦に臨むのだ。

少し歩き、広い広場まで出た、人がいる地域から離れた場所だ、此処なら、思う存分戦えるだろう。

そして、広場の真ん中で歩みをとめ、振り返った。

「出て来い、いるのは分かってるんだ」

此処最近狙いを定めた、吸血鬼の後をつけている、もちろん能力をしようしているため、相手の探知の魔法に引っつか

ることはないだろう、
相手も俺が後をつけていることは分かっているようだ。

今日も一人にはならなかった、
一人になり、回りに誰もいない場所に行くのを待っているのだ。此
処まで視線を印象つければ、
いつかは何とかしようとして、自分を誘い込むのは分かっていた。
その日をのんびり待つだけだった。

満月の夜、吸血鬼の魔力が移動を開始するのを感じ、これは誘って
いると理解し、すぐさまその場所に向かう、その場所にいたのは吸
血鬼一人だけだった。
人気のない場所に歩みを進めていた、その後ろを静かについいてい
く。

そして、吸血鬼はが歩みを止め、言い放った。

「出て来い、いるのは分かっているんだ」

俺はその言葉を確認した後、その場に結界を張る、認知障害の結果
だ。

学園側に悟られるわけにはいかないからな。

そして、静かに姿を現す。

「貴様が、此処最近、私を付け回しているのは」
その言葉には答えない。

「そうか、黙秘か…ならば喋らしてやる、実力だな！」
そういつて、吸血鬼は俺との間合いを一気に詰める、

おかしい…

少し、こいつの実力を見誤っていたのだろうか…

もとよりこいつには、相当な実力を持っていると思っていた。

しかし、実際戦ってみて、分かった。

こいつは弱い、実力を隠している可能性は捨てきれないが、実力の半分もだしてないゆるい攻撃を、一生懸命にかわすこいつは明らかに、弱い。

体術はタカミチと同等またはそれ以下、内包する魔力はそこが知れないが、体に纏う魔力はまだまだ、雑で荒が目立つ。

確かに平均よりはだいぶ強いだろう…

しかし、今戦っているのは、最強の吸血鬼だ、この程度の力で挑むなど愚の骨頂だ。

少し、距離を離す。

相手はこの程度の動きに息を荒げてみせる。

ふむ…

攻撃の手を下げ、男に言い放つ。

「飽きた、お前は殺す価値もない、次私の前に立ってみろミンチに

してやる。命を大事にするんだな」

柄にもないことを言ってみせる、やはり私もぼつやの影響を受けているのだろうか…

そう考えると少し、おかしくなった。

男に背を向け、歩き出す。

背を向けているとはいえ、男が怪しい行動をすれば即座に対応できるだけの警戒は怠らない。

広場を去ろうとしたときに男は、一言つぶやいた

「やっぱり、能力使わなきゃこの程度か…」

その言葉とともに、男から、魔力反応が消える。

その行動をおかしく思い、振り向く。

男は、静かにこういった。

「吸血鬼、お前は此处までだ、泣いて許しを請いたって、ころしてやんよ」

その言葉に少し力チンと来た。

あんな弱い奴が私をコロスだと？笑わせるな。

「お前、その言葉に後悔するなよ、最強の吸血鬼を怒らせたことを後悔させてやる」

その言葉と同時に呪文を唱え始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ、氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

その呪文を唱える間、男は微動だにもしない、こいつ死ぬか？

まあいい、死んで後悔するんだな！

「『闇の吹雪』」

視界一面が白く覆われた、あたる寸前の男は、笑っていたような気がした。

やはり、この程度だったか…

闇の吹雪を放った後、放ったほうを見向きもせずに家路に付こうとする。

あの程度の実力で私にはむかったことを地獄で後悔するんだな。

「おい、吸血鬼どこにいくんだよ？」

その言葉にハッと振り返り後ろを見る。

そこには先ほどとなんら変わらない男がたたずんでいた。
その顔に薄ら寒い笑顔を貼り付けながら。

どういうことだ？

必死に考える、先ほどの攻撃を防いだのか？あの程度の男が？
その思考は男の言葉にさえぎられる。

「まあ、最強の吸血鬼をいえど、俺の能力は破れねえんだよ！」
その言葉を皮切りに、男は私に向かって走りだした。

そのスピードは先ほどやり合ったときの数倍のスピードだ。

ツチ！！

やはり実力を隠してたか…

しかし、先ほどに比べスピードは上がったものの攻撃モーションが丸見えだ。

この程度捌くなど造作もないこと。

そう思って、相手の拳を受け流そうとする、

バキィィィ！！と大きい音が広場にこだまする。

私は目を疑った、受け流そうとした、私の腕が大きな音を立てて折れたのだ。

状況に混乱しながらも、男と距離を開ける。

腕の回復は造作もないが、先ほどの攻撃は一体、

男は先ほどと変わらず魔力で包んだ、腕にもかかわらず…

私の腕を破壊した、そこには何らかの魔法が働いていることには間違いない。

そう理解し、近距離は危険と判断し、さらに距離を離す、

男は不適に笑っている。

そして、さらに男は距離を詰めてきた。

その攻撃は、当たるのは危険だと思い、攻撃を受け流すのではなく、

避ける。避ける。避ける。

相手の攻撃はあたりなどしない、スピードはすごいが交わすことは余裕だ、

最後に大降りの拳をよけた後に、無詠唱の断罪の剣を顕現させる。

「調子にのるなよ！」

その言葉とともに、男の首に向かって、剣を振り下ろす。

しかし、

ギンと音とともに、断罪の剣は真つ二つに折られた。

つつな！！それにはさすがに驚きを隠せない。

それほど強い魔力にも覆われていないのに、私の断罪の剣が折れるだど！

あっけにとられている、私に向かって男は拳を振り下ろす。

しまっっ！！

大きなモーシヨンの拳は私の障壁を諸共せずに、私に突き刺さる。

大きな音を立てて、まるで質量を持たないように、猛スピードで飛ばされる。

たくさんの木々に体を打ちつけようやく止まった、

これは・・・

体中の骨が折れる音が聞こえる。

吸血鬼にとって、生命を脅かすほどではないが、それでも動きが取れないほどのダメージだ。

なぜ！！これほどの威力が・・・！！

「こんなところまでとばされちゃったかw少しやりすぎちゃったかな」

軽い口調の男が、現れる。

体中が悲鳴を上げるのを無視して、立ち上がり距離をとる。

冷静になり、状況を判断する。こちらの攻撃は通じない、相手に触ればこちらがダメージを受ける、一体どのような手を使えば、このようなことができるのだろうか、

男はこちらを一見して、攻撃の手を加速させる、先ほどとは違ってこちらは相当なダメージを受けている。裁ききれずに相手の攻撃がボディに入る、

全身に響く大きいダメージだ、ひざが折れそうになる。

さらに男は容赦なくこちらに攻撃を加えてくる、攻撃をよけようにも、先ほどのダメージで攻撃をよけることが出来ない。さらには相

手のスピードは初期とは大違いで、だんだんと加速していく。

体中が悲鳴を上げる。

蹴りが入り、体勢が崩れる。

ダメージが大きく、うまく呼吸をすることが出来ない。

「早くたてよ！吸血鬼！」

その言葉と同時に臥した私の脇腹に蹴りが入る、

ボールのように転がっていく。

ぼやける視界の中で必死に考える、

どうすれば・・・

闇の魔法はダメだ、こちらが触れなくてはダメージを与えられない
なから、

それなら・・・これならどうだ！

男がこちらに近寄る前に悲鳴をあげる体を起こし、

宙に逃げる、男はこちらを見ながら笑っている、既に限界が近いの
が分かってているのだろう

「っち！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック契約に従い、我に
従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。
全ての命ある者に等しき死を。其は安らぎ也。『おわるせかい』」

自分の最大限の攻撃を相手に放つ。

全身全霊、すべての魔力を込めて魔法を放つ。

放つと同時に地面に落ちる。既に意識は朦朧としている。

しかし、

「そんなんじゃないだめだよね」

その言葉と同時に男に当たったはずの攻撃がまるで、男の前に壁があるかのように方向を変え私に牙をむいた。

なに・・・反射・・・だ・・・と

緊急に回避をしようと試みるが、既にぼろぼろの私の体は動かない、それに私が全力ではなった魔法だ、規模が違う。

よけっきれ・・・な・・・い

視界が自分が放った魔法で埋め尽くされ、自分の前に誰かが割りいったのを見て意識はそこで途切れた。

闇（後書き）

ちよつと短いかな

闇（前書き）

感想まってまーす

闇

突如発生した魔法結界、それもかなり高度な奴だ。

これぐらいの結界なら学園を欺くことは容易だろう。しかし、現在麻帆良に張つてある結界は僕が作ったものだ、些細な異常でもすぐに感知することが出来る。

満月の夜、その異変を感知し、気だるげながらも久々に強者と戦えるかもしれないという思いをさせ、体を起こした。

しかし、よくその異常を調べると中にキティがいるではないか、それを感知し、急いで現場に転移した。

転移した先は、一面真っ白これは・・・

キティの魔法か？

後ろを見ると相当弱っているだろうキティ、その姿を見ると沸々と怒りがわいてきた。

キティをこんなにしたのは・・・ダレダ・・・クロス。

一瞬にして沸騰した頭を冷やす、そして、キティの魔法であろう『おわるせかい』に手をかざす、それだけで、その荒れ狂う冷気は一瞬にして、手に吸い込まれていった。

光が晴れ、相手が姿を現す。

そいつはどこにでもいるような容姿をしていた、しかただひとつ違ったのは壊れた笑みを顔に貼り付けていたことだ、そいつを見た瞬間にキティをやったのはこいつと判断した。

その男を背にして、キティの介抱を始める、

「キティ、すまない遅くなってしまった」

そういつて、黒の指輪の効果を発揮させる。

黒の指輪が発光すると同時に、キティの体の傷は殆どが直りかけていた。

「・・・おにい・・・ちゃ・・・ん・・・」

キティは苦しそうに僕を呼ぶ。うなされているキティをやさしく抱きしめる。

すまない、キティ、お前をこんなにした奴は絶対に・・・クロス

後ろから声がかかる、

「あのさあ、俺、今悪の吸血鬼退治してる訳！邪魔しないでくれる・・・かな！！！！」

その言葉と同時に、男は瞬動のスピードは優に超えていようスピードでエレオスに蹴りを放つ。

しかし、その蹴りは虚しくも空を切る。

「ありや？どこいった？」

蹴りを放ったポーズのまま男は硬直する。

突然の乱入者によって目的の吸血鬼を連れて逃げられた状況にもかかわらず、自分の能力に絶対の自信がある男は、笑みを崩さない、壊れた笑みを。

壊れた笑みを浮かべた男が作り上げた結界から、数km離れた森の中にエレオスはいた。

外傷は既に治っているが、ダメージが完全に抜けていないキティをそこにそつと寝かせる。意識はまだ戻らない。

意識なく、自分の名前を仕切り、うめくキティの頬をやさしくなでる。

「キティ・・・すまない、少し此处で待っていてくれ」

そういったエレオス是一片のカードをキティの近くにおく、するとそのカードはポンという小気味な音とともに一人の女の子に変わる。

「久しぶりだにゃー、外の世界は！」

その女の子は、猫の耳、猫の尻尾をつけた身長140cm程度の可愛らしい少女だ。

「シャル・・・少しの間、その子を見ていてくれないか？」

「にゃー、エレ君じゃないかにゃー！この子？まかせるにゃー」
その女の子は元気よくうなずき、トコトコとキティに近寄る。

この子、シャルは僕の召還できる悪魔のうちの一人だ、可憐な見た目にぞぐわず、一応、爵位はもっていないがそれでも侯爵クラスのレベルの持ち主だ、たとえナギと対峙したとしても、キティを連れて逃げ切るくらいは出来るだろう。

「それじゃ、僕は少し片付けがあるから」
そういつて、先ほどの方向に転移のゲートを開く。

いつてらっしゃいにゃー！という元気な声を背にゲートをくぐった。

先ほどの男は、連れ去られた吸血鬼のことをどうするべきか悩んでいた。

吸血鬼連れ去っていった男は、相当なレベルだろう俺が負けることはないが・・・

先ほどから吸血鬼の魔力を追っているが一向に見つかる気がしない、ああこのこと、学園側に言われると厄介だなあ・・・

そう考えながらも、笑みは崩さない、

よし、考えても始まらないや！吸血鬼を探しにいこう！

魔族は皆殺さなきゃダメだしな！

あの吸血鬼・・・どうやって殺してやろうか・・・？

甦るか？どうせ吸血鬼だ再生が効くんだ、生きてるのを後悔するぐらいの殺し方してやんよ！

再び、壊れた笑みを顔に貼り付け、吸血鬼追うために一步踏み出した。

そのとき、そいつが現れた。

転移した、先に男はいた、先ほどの笑みは変わらないまま。

男はこちらの姿を視認すると、無警戒のまま話かける。

「あんたさぁ・・・あの吸血鬼どこやったの？俺えあいつ殺さなきゃだめなんだよね！」

その言葉に、エレオスは答えない、

「しってるだろう？あいつは魔族なの、ころさきゃならない存在なの、わかっ」

その言葉はいい終わることが出来なかった。

エレオスからあふれ出る魔力の総量が今まで見たことのないような量で、それが振動し空気を揺らしていたからだ。

「お前は・・・やりすぎた、簡単に死ねるとおもうなよ・・・」
エレオスが静かにそう告げると、男はおもしろいじゃん、といって拳を構えた。

周りの空気がよどむ、二人の間に魔力の渦が生まれる、

先に手を出したのは男だ、すさまじいスピードでエレオスに迫り拳を突き出す。

その拳を魔力の障壁でガードしようとする、

しかし、障壁はまるでなかったもののように通り過ぎる。

「ツツチー！」

その異変に驚きながらも拳をすんでのところで回避する。

「へえ今の避けるんだw」

そう軽口をたたきながらも男は攻撃の手を緩めることはない、

しかし、すべての攻撃がエレオスに届くことはない。

分からない・・・なぜこの程度の相手にキティがあそこまでやられていたのか。

攻撃のすべてを裁き、時折距離を離し思案する。

キティの体の外傷を見ると、何かの衝撃によつてのダメージが多かった。

キティならこの程度かわせないまでも裁くことは出来るはずだ、つまり、この障壁を無視して攻撃してくるこいつの体には触れてはいけないってことだ。

障壁が無視された理由も分からない。

さらにだ、僕がキティの前に転移したときの僕がかき消した魔法あれはキティのものだ、つまりあいつは魔法を跳ね返す、またはコピーの能力を使うということだ。確立は低いけど、僕と同じくキティの魔法を完全に支配した可能性もある。

そして、決定的にこの男がどの様にして此処まで早く動いているかということだ。

魔力の量も多いが、魔力運用が出来ていない、動けたとしても此処まで早く動くことは出来ないはずだ。早い動きに思考が付いていないのか攻撃もワンパターンだ。

ふむ・・・どうしたものか・・・

「ツチ！なんであたらねえ！」

攻撃の当たらない現象に男は苛立ちを見せていた。

相手に触れないとダメージは与えられない、先ほどから魔法も織り交ぜて攻撃しているが、魔法は相手の魔力の渦に近づくことすらできない。

少しの思案の後、男は受けに回る選択肢を選んだ、攻撃の手を休め、相手の動向をうかがう、

相手はこちらをどう攻めていいのか悩んでいるのだろう、こちらの能力の効果も少しつかんでいるようだ。

考える！悩め、そして攻撃しろよ！そのときがお前の終わりだ。

先ほどまでの焦りは消えて男には再び笑みが戻った。

男が攻撃の手を休めたときに相手の能力を確信した。

相手が攻撃を休めるということ、それはこちらの攻撃まち、つまり男の能力は、絶対二防御が出来る能力であり、そこから攻撃につながる能力だ。

こちらの攻撃を利用するのか・・・？

だとすれば、仮説は証明できる。キティが受けた全身への衝撃あれは・・・

男から確証を得るために、カマをかける。

「お前の能力・・・珍しいものだな」

そう男に問いかけると、男は少しあせったような素振りを見せる。

「分かったような振りしてんじゃねえよ！」

男も馬鹿ではない自分の能力のヒントになるような言葉はいわないだろう。

そう判断したエレオスは一瞬にして、男の後ろに移動する。

完全に男はエレオスを見失っている。

「どこ行きやがった姿あらわせやあ！」

そこら辺にあった、木の棒を拾う、それに魔力を通わせ始める。エレオスクラスの魔力が通った木の棒はそこら辺の名刀にも負けはしないだろう。

「まず、一つ、物理衝撃の制御」

その言葉と同時に男の背にその木の棒を投げつける。

言葉にハツとした男が振り返る寸前に木の棒が直撃する、しかし、その木の棒は投げつけたエレオスに向かって直進する、それを右手でたたき落とし。

「っち！糞が」

男は自分の能力を当てられたからなのか、焦りを見せる。

さらにエレオスは男の真上に移動する、またしても男はエレオスを見失い焦り始める。

「二つ、魔法衝撃の制御」

エレオスは無詠唱の雷の暴風をぶつけるが先ほどの木の棒と同様にエレオスに向かって、直進を続ける、それに手を掲げ握りつぶす。

そして再び地に下り、男と相対する。

男の顔に先ほどの笑みはない、しかし、少しの焦りの中にも余裕の色がうかがえる、

「・・・流石だなあ何処の誰か知らないけど、そこまで知られたのはお前が初めてだよ！」

その言葉は少し自嘲しているようだった。

また男は笑みを浮かべ言い放つ。

「それで？分かったからってどうすんの？お前の推理は正しいよ、確かに俺の能力は物理・魔法の制御だ・・・でも、それがどうした？分かったところでお前じゃ俺は止められねえんだよ！！」

男は又もエレオスに近寄り攻撃を繰り返す、すべてが避けられながらも、

その顔は余裕の表情だ。

ふと、エレオスは男と距離を離す。

「なんだあ？逃げるのか？だろうな、絶対にお前は俺にかてねえよ！」

男はそういつているが、自らの攻撃を当てることも出来ないのので、少し焦りが出てきている。

しかし、エレオスは急に後ろ向き空を飛ぶ。

「お前は自分で自分の能力を何処まで知っている？」

エレオスはそう言い放つが男は意味が分からず、はてなを浮かべる。

「自分の能力は絶対敗れない、限界も知らないのか？もしかしたら一定以上の衝撃は防げない、そんなことがあるかもしれないじゃないか」

男はエレオスの意味する言葉を理解したのか、鼻で笑う。

「くだらねえ、限界なんてねえよ、絶対だ絶対の能力なんだ!!」

男から見たエレオスの姿が月に重なる。

「この攻撃が防げたら誇つていいぞ、お前に通る生物からの衝撃はねえよ」

そういった、エレオスの指輪が大発光を始める、

その姿にどこか魅了され、男は動けない、何より周囲を渦巻く魔力の量が桁違いだ。

エレオスの姿はいつの間にか、黄色と青色を基調としたアーティファクトに着替えており、黄と青のグローブから発せられる魔力が周囲をゆがませる。

「氷神雷神」

その二つのグローブを男に突き出し、魔力の集約を始める。

氷神雷神の魔力を全部、つぎ込む、大きな魔力塊が雷と雹を帯びる、その集約された魔力の量は半端ではない。

既に集約された魔力の圧で周囲の木々は吹き飛ばされ、地面は変形している。

崩壊していく、世界を現しているようで、その中心に神々しく輝いている、エレオスはまさしく、神、いや男からすれば魔王であろうか、とにかく、美しかった。

「なんだよ・・・なんだんよお!!!!!!!!!!」

男はこれを見て、初めて魔法に対しての恐怖を覚えた、先ほどいわれた言葉を思い出す、

限界・・・それがこの能力にあるかも知れない。

そんな男を見て、エレオスは薄く笑う。

「じゃあ・・・生き残れたらな」

そういつて、その魔法は放たれた。

闇（後書き）

猫耳娘を出してしまった・・・しかし後悔はしていない。

間の話・番外編

僕が魔法世界にいたときの話だ、

そこで僕は酷く精神にやんでいた、何故なら不死の魔法使い、エヴァンジェリンの大規模征討が行われるという話を耳にしたからだ。

僕ら兄弟は連絡を取る手段を持っていない。そのためにキティの安全も定かではないのだ、

流石にキティが死ぬことは無いだろうとは思うが、考えれば考える程不安は募っていく。

キティとはまるで、磁石の同極のように近づけば自然と離れていく魔法が掛けられているのだ。

つまり此方が探しても見つかることは無いのだ。

何度もこの手の魔方陣を破壊しようと思ったが、実行する寸前で、リリアの悲しい表情が脳裏に浮かんで、いつも寸前で手を止めてしまう。

そこで、僕はある考えに至った、

どちらかの存在を大きくしてしまえば、此方に気づきコンタクトを取ることは可能ではないのか？

たとえば、僕が此処で有名になれば、キティに僕の健在を知らせる

ことはできるだろう。

逆にキティの賞金首が健在な今、まだキティが生きている証拠なのだろうが、どうにも今流れている話は真実らしい。

その話によれば、一週間後にキティの現在の所在地に総攻撃を仕掛けるらしい。

既に征討のメンバーは1000人を超しているらしい・・・

普通の魔法使いが1000人束になろうがキティならどうってことないと思うのだが、

今回の征討には何故か「歴史の埋没者」が数名参加するとか・・・

「歴史の埋没者」ってのは歴史の影に常に暗躍してきた、影の実力者の事だ、

実際僕も何度か対立したことがあるが、あの強さは半端ではなかった。僕も思わず本気を出してしまう所だった。

なぜ今回のキティの討伐に「歴史の埋没者」が参加するのは定かではない。

ただ、キティを征討することは絶対に見逃さない、

今までも歴史の埋没者と戦ったが、殺した記憶はない、つまり僕から逃げ切るだけの実力は持っているのだ。

キティも戦えば無事ではすまないだろう。

キティが傷つくことは許さない！！

やれやれ、たかが吸血鬼一匹にこの人数は何だよ…
皆大人げないねえ

心の中でそうつぶやく。

「レイン！今回の作戦をなせば、最強の吸血鬼一体の資料が手に入るんだ、手伝ってくれよ」

そういった男は俺の相棒、今回の作戦の提示してきた奴だ。
適当に返事を返しておく。

こんなでかい事件に発展したのはこいつのせいだ、こいつが魔法世界の
上層部を唆したの分かってる。

そんなことができるのはこいつくらいだからな。

なぜ、俺までこんな下らんことに参加せねばならんのだろうか…
確かに、自分の魔法を圧縮して体内に取り込むという秘儀をやつて
のける吸血鬼だ、その技術を俺の研究に注げばさらに魔道の深淵に
辿りつけるだろう。

ただ、それにしたって吸血鬼一体に俺がわざわざ出向くのも面白く
ない、

「つまらなそうな顔をしてるな、レイン」
そう声を掛けて来たのはドランパル。

龍種とエルフ種の間にも生まれたらしい。

龍種の圧倒的な魔法力とエルフの精密な魔力操作を持っているので、
俺が今まで戦ってきた中で最も強いと思われる、今回の作戦に関し

ては味方らしいな、

「……お前が居るのに、俺が居るのか？」
純粹な疑問をぶつけてみる。

ドランパルト・それと今回の征討の指揮をしているフラテカ・そして俺は俗に「歴史の埋没者」と呼ばれているらしい。
そんな三人が出るほどの相手なのか、甚だ疑問である。

「確かにな……たかが吸血鬼一匹に我らが出る幕も無いと思うのだが……」
たかが吸血鬼一匹、そういえるのはこいつが今までに何匹も吸血鬼を殺してきているからだ。

確かに吸血鬼は力を魔力はたいしたもんだが、今回の相手は悪かったな。

最強の吸血鬼も此処で終わりか……

「だよな……というわけで、俺は帰る、フラテカに言つてくれ」

そういつて、今懷から転移魔方陣を取り出そうとする、

ドランパルトは一言分かったと返事をして背を向けて去っていった。

俺が居なくてもこいつ一人で大丈夫だろう、

転移魔方陣に乗ろうとしたとき、

「ちよつちよつと！！まてまて！」

フラテカが俺の手をつかんで引き止める、

「うち、こいつ気配無いから気がつかなかった、

何かを説明しようとしているフラテカのセリフを遮って告げる。

「俺が居なくても十分だろう、正直に言うとな今回の吸血鬼の実力はもう分かってる」

「戦闘ならドランパルトと同程度、またはそれ以下だ、今回はドランパルトの上にお前まで居る、その上、上級魔術師1000人のおまけ付きだ、負けるわけがねえだろ」

フラテカはそのセリフを聞いた後不適な笑みを浮かべて、俺にこう告げた。

「しってるか？最強の吸血にはなあ、最凶の兄弟が居るらしいぜ？」

その言葉に俺は頭をかく、意味がわからない、こんだけ大事にしておいて兄弟だとかどうせ実力も同じぐらいだろう、

それならこいつとドランパルトでどうとでもなる。

「どうせ、雑魚だろ、俺は帰るぞ」

「まあ聞け、コレは上層部でもトップシークレットなんだが、こいつは、80年前に上層部のトップと戦って、自分の存在を歴史から消したらしいぞ」

「そんなことして、どうするってんだよ？」

「さあ吸血鬼の考えることはワカランよ」
そういつて、俺の手を離れた。

「お前が欲しいのはソツチの吸血鬼か？」
振り返ってフラテカの表情を見る。

「そういうこと、そいつと戦った事がある奴の話聞いたが…あ、もちろん俺らと同じ歴史の埋没者のことだが、全魔力を使ってその場から逃げ切るのが精一杯だったらしい」
フラテカの顔をにやりと笑ってゆがんでいる。

仮にも歴史の埋没者と呼ばれているほどの実力者が、全魔力で逃げ切るの精一杯だと・・・
興味がわいたな・・・

「ま、そんな訳で今現在最強と呼び声高い君を呼んだわけだ、がんばってねえ」

そういつて、フラテカは光に包まれて消えた。
転移で作戦会議所に戻ったのだろう。

まあ面白い話を聞いたな・・・
最凶の吸血鬼ね、本当にその史実どうりの実力なら、俺も久々に本気を出せそうだな。

その最凶の吸血鬼やらが来るまで一眠りしますか・・・
ようやく眠りに付きそうなとき、俺の耳にたくさんの悲鳴がこびりついた。

なるほどな、

確かに1000人ほどの人間がひしめき合っているな。

ただ、コレだけの実力者が集まって、さらに、三つの大きな魔力を感じる。

こんだけ居ればキティも負けてしまつかも知れないな・・・

ふとキティが居るであろう方向に目を向ける。

既にキティの魔力が感じ取れるほど近くに居るのに、会うことができない。

どうしても足がすすまないのだ。非常にもどかしい。

まあ、キティが無事であるということが分かったのだ、それだけでよしとしよう。

既にキティは襲撃に気づいたのか、猛スピードで此処から離れている。

うん、勝てないと悟ってからの反応は早いな。いい出来だね、

こいつらはまだ、キティが此処に居ないということに気づいていない。

いや、一人気づいてる奴が居るな、かなりの実力者、しかもそれを知って動こうとしない、

少しの殺気を開放すると、やはり此方の方角を向いてニヤリと頬を歪めた、

なるほどな、これは僕を誘い出すためのものか・・・

おもしろい、乗ってやろうじゃないか！

瞬時に転移する座標を入力して、相手の真っ只中に転移した

間の話・番外編（後書き）

正直に言うと、受験勉強でそれどころでナイのです。

後前の話詰めすぎて展開ができないのです。

あとこんな感じで受験勉強の合間に超不定期更新します。
息抜きなんで、すみません＞＜

間の話・番外編2

- h u r a t e k a s i d e -

「凍れ」

その一言、突然陣形の真ん中に現れた奴がその一言発しただけで、そこ居た百人程度の魔法使いが凍結する。

流石に上級魔術師だ、この非常時にも関わらず既に攻撃態勢に移っている、

相手が氷系の呪文を使ったことからか、皆唱えている呪文は炎系の呪文ばかりだ、

あちらでは、古代魔法まで使ってる奴が居る。

しかしどれもが意味を成さない、

「はは… 此処までとはな」
思わず声が漏れてしまう、

当初計画していた予定では、奴が妹を守るために此処に現れたらすぐ命令系統を出せるようにすべてのメンバーに伝達の魔法を行っていた。

だが、奴が現れたほんの数秒でこの有様だ。

「ぜ、全員に告ぐ、各持ち場について攻撃を行え、当初の予定どう

り吸血鬼狩りの装備を認める」

だが、まだ立て直せる。

此方には吸血殺しの武器があるのだ、さらにはドラムパルト、そして俺あと、最強の男が控えているのだ、負けるはずが無い。

そう、負けるはずが無いんだ・・・

- reinsaide -

俺はその光景を目の当たりにして感心した、

あの吸血鬼中々に強い、Sランク・・・いやそれ以上か。

この立ち回りの中で絶妙に吸血殺しの武器のみをかわし残りの攻撃すべてを障壁で防御、または原理は分からないが攻撃が霧散している、

これじゃ、流石に魔法使い千人じゃ勝てないか・・・

魔法使いの強さは数では決まらない。

どんなに人数がいたとしても最強の敵が居れば倒せないのだ。

確かにあいつはその最強の敵の部類に入るだろう。

だが、まだだ。

まだ俺が出るほどの相手じゃない。

所詮はこの程度か、少しの落胆に息をつく。

- d o r a n p a r u t s i d e -

強い・・・確かに強い。

最強の吸血鬼、此処に残って正解だったのかもしれない。

しかし、この吸血鬼も運が悪い、どんなに強かろうが流石に「歴史の埋没者」三人は倒すことはできないだろう、しかもその内一人は「歴史の埋没者」最強の男だ。

ちらりと、レインの方を見やる。

少し、残念そうにため息をつき、一度此方を見てから再び目を閉じた。

奴はいつもそうだ、自分が楽しめそうに無いときはいつも俺を一目見て任せたーで自分は無関心。

まあ今回もこれで勝敗分かったわけだ、あいつが無関心ということはやはりレインならば勝てるのである。

しかも今回の敵は面白そうだ、回してもらえてよかったと思うことにしよう。

- s i d e o u t -

段々と面倒くさくなってきたな・・・

流石にこの人数だ、多少魔力を使って倒すことも辞さないと思っていたのだが。

うしろに居る三人、あいつらは別格だ。今回参加したと「歴史の埋没者」であろう。

さり気なく一本の魔法の弓を一番奥で眠っている奴に向けて放ってみる、距離は6400mほど。

魔力はあまり込めていない、所轄けん制だ。込められていないといっても、そこらの上級魔術師の魔法の矢20本分くらいだ。

しかし、弓はそいつに届く前に前に立っている、龍種に阻害された。

ふむ・・・反応は悪くない。

楽しくなりそうだ。

あと、この雑魚1000人と戦うのも飽きてきたな。

魔力を多少発揮したところで学習しないのか、此方に魔法で攻撃してくる。

それを吸収しているので、常に魔力は満タンだ。

たまに吸血殺しの武器が飛んでくるが、当たらなければなんの意味も成さない。

よし、一掃しよう。

「契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。全ての命ある者に等しき死を。其は安らぎ也。」呪文の詠唱と共に全方位に最固の結界ははる、これで吸血殺しも届かないだろう。

此方の呪文を聞いてか、周りで逃げ出す者もでた。

それもそうだろう、いままでの自分達の攻撃で与えられたダメージが皆無なのだ、
いまだに数百人の人数が居るのにだ、

それでは、千人も集まって申し訳ないが・・・さよならだ。

「『おわるせかい』『こおるせかい』」

半径1000m圏内から一つを残して生命反応は消えた。

間の話・番外編2（後書き）

この程度の分量なら更新できるんです、結構なスパンで。

あとやっぱり感想貰うと書かなきゃってなってしまうw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3508m/>

エヴァ兄

2011年8月7日22時49分発行